

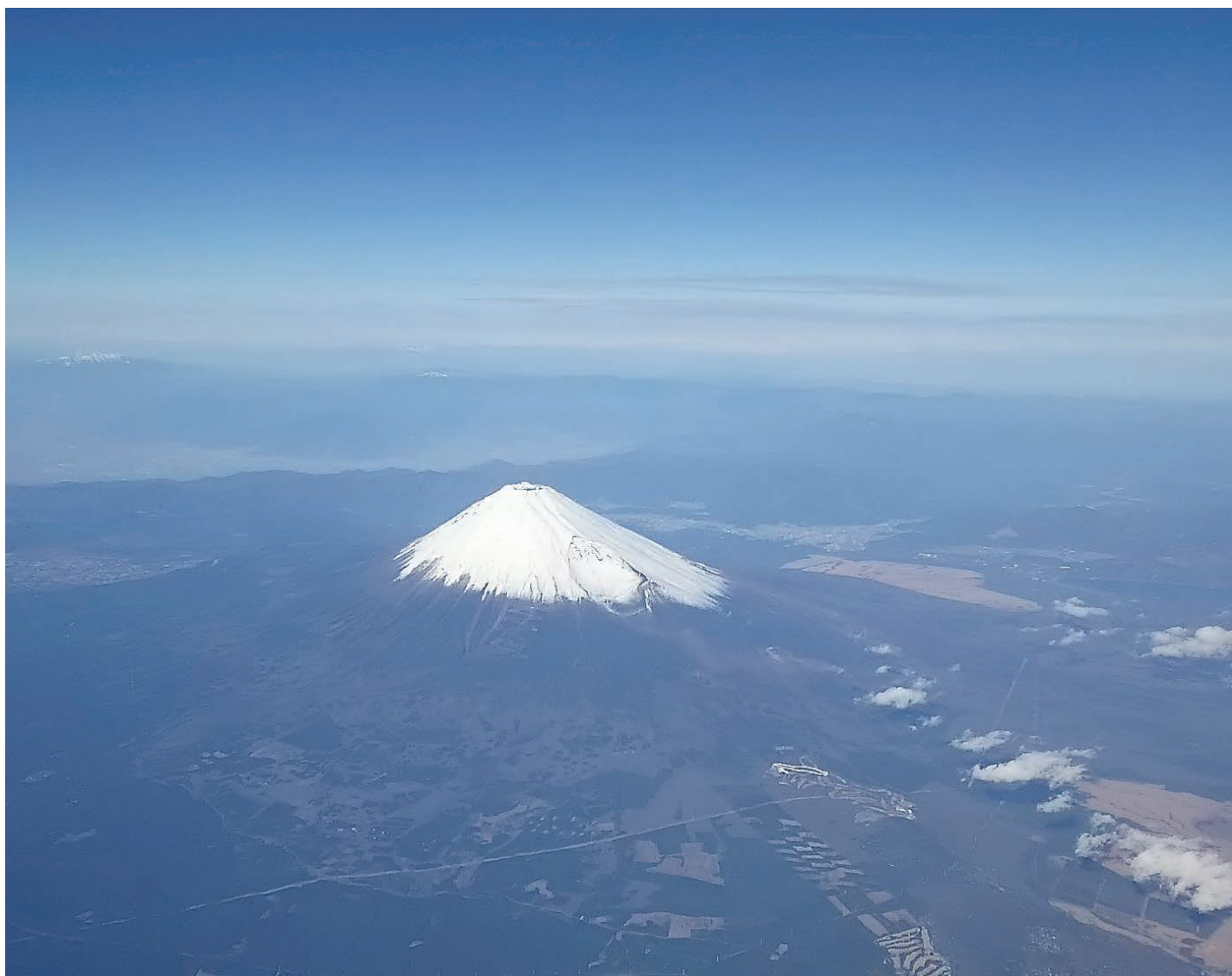
このマーク（複十字）は、
世界共通の結核予防運動の
旗印です。

No.
372
2017.1

結核・肺疾患予防のための 複十字

2017年アジア太平洋「肺の健康」学会ハイライト
第75回日本公衆衛生学会総会(大阪府)報告
第47回UNION肺の健康世界会議(イギリス)報告
第25回結核予防及び胸部疾病日中友好交流会議報告

アジアと
世界の結核を
なくさなければ
日本の結核は
なくなる



健康日本21

公益財団法人結核予防会

本誌は複十字シール募金の
収益により作られています
<http://www.jatahq.org>



第19回秩父宮妃記念結核予防功労賞 世界賞の授賞式 (イギリス リバプール)



工藤結核予防会理事長（左）よりアスマ・エル・ソニー氏（右）に表彰状を授与

イギリス リバプールにて開催された第47回国際結核・肺疾患連合（The UNION）肺の健康世界会議の10月29日に、第19回秩父宮妃記念結核予防功労賞・世界賞の授賞式が行われ、アスマ・エル・ソニー氏（スーダン疫学研究所長）が表彰されました。本会を代表して、工藤結核予防会理事長より総裁秋篠宮妃殿下からの表彰状が授与されました。

アスマ・エル・ソニー氏は、結核研究所の国際結核対策研修の卒業生であり、スーダン国の結核対策プログラム代表として尽力し、紛争地域を除く国中にDOTSを普及し、2002年に「DOTS is over」を宣言するなどスーダンの結核対策推進に大きく貢献したその功績が認められ表彰されました。

結核予防会、カレル・スティブロ公衆衛生賞受賞

このたび、結核予防会は70年以上にわたる結核対策への貢献により、国際結核肺疾患予防連合（The Union）が主催するカレル・スティブロ公衆衛生賞を受賞した。

同賞は、結核対策の分野で10年以上貢献した保健医療従事者及び団体の功績を称えて贈られるもので、The Unionの学術部代表を務め、後にWHOによりDOTSと名付けられた結核対策モデルの開発に中心的役割を果たしたスティブロ博士に敬意を表して名づけられたものである。

とりわけ1963年から結核研究所においてJICA 国際研修を継続して実施し、各国の結核対策従事者の育成に努めるなど、本会の世界的な貢献が評価されての受賞となった。

10月27日、第47回肺の健康に関する世界会議（於 リバプール）の中で授賞式が行われ、カーター The Union会長より工藤理事長に賞状が手渡された。





公益財団法人北海道結核予防会
会長 上村 友也

謹んで初春のお慶びを申し上げます。

このたび、第68回結核予防全国大会が平成29年5月18日、19日の両日、北海道で開催されます。この大会が北海道で開催されるのは、昭和33年の第9回大会以来、実に59年振りであり、北の大地に全国の皆様をお迎えすることは誠に喜ばしいことであります。

さて、先に厚生労働省から公表されました「平成27年結核登録者情報年報集計結果」によりますと、平成27年の結核罹患率（人口10万対）では14.4であり、この15年間だけを見ても約半数にまで減少してきております。

しかしながら、我が国の結核の状況は、結核罹患率の地域格差、ハイリスク集団への集中、外国人結核患者の増加、高齢者結核の増加など多くの課題を抱えており、国が掲げる「2020年までに10.0以下」との目標に向かって、なおいっそうの取り組みの強化・充実が

求められます。

都道府県別にみますと、北海道における結核罹患率は9.9と初めて10を切り「低まん延状態」ととなりました。全国では低い方から9番目となっております。

北海道においても、人口の高齢化や地域の過疎化が進む中、行政、医療機関、健診機関、婦人団体等の関係者がそれぞれの役割を果たしつつ、相互の連携を保ちながら、各種の結核対策を推進してまいりました。

結核予防全国大会が開催される5月は、北海道では新緑の季節であります。春盛りの北国で、豊かな自然と海の幸山の幸をお楽しみいただければ幸いです。

現在、大会の成功に向けて鋭意準備を進めているところでありますので、ぜひ全国から多くの方々にご参加いただきますようお願い申し上げますとともに、ご参加の皆様にとって有意義なものとなりますようご祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。🐱

Contents

■ メッセージ	
年頭のご挨拶 —北の国へようこそ—	上村 友也……1
■ 新春ご挨拶2017	
アジアと世界の結核の抑制なしには日本の結核はなくなる	工藤 翔二……2
平成29年新春にあたり	中井 誠一……3
全国大会開催にあたり	齋藤 芳子……3
■ APRC2017	
2017年アジア太平洋「肺の健康」学会ハイライト	森 亨……4
■ 第75回日本公衆衛生学会総会	
●次世代の健康社会実現のための公衆衛生人材育成	谷掛 千里……8
●結核集団発生対策に関する自由集會に参加して	島村 珠枝……9
■ シリーズ 結核対策活動紹介	
長崎県の薬局DOTS展開に向けた取り組み	濱田由香里……10
■ 世界の結核事情 (7)	
グローバルファンドの世界での結核対策への取り組み	國井 修……12
■ 第47回国際結核・肺疾患予防連合 (The UNION) 肺の健康世界会議	
●分子生物学的アプローチが世界の結核対策に貢献するという認識	慶長 直人……14
●タバコと耐性菌に立ち向かう	河津 里沙……15
■ シリーズ 結核予防会国際研修50年を振り返って (6)	
●世界の結核制圧の柱は人材育成—我が国の役割と展望	石川 信克……16
●結核対策手法を保健システム強化に応用	Asma El Sony……18
■ 世界の結核研究の動向 (1)	
EMBO conference “Tuberculosis 2016: Interdisciplinary research on tuberculosis and pathogenic mycobacteria” に参加して	瀧井 猛将……19

■ Dr.黒崎の胸部画像診断教室 No.2	
胸部CT：どうして撮るの？	黒崎 敦子……20
■ 第25回結核予防及び胸部疾病日中友好交流会議報告	
●結核対策の共同研究を目指して	前川 眞悟……22
●日中両国の専門家が手を携えて共に努力する	孫 穎……23
■ ずいひつ	
私の人工気胸時代	樋口 恵子……24
■ たばこ	
厚生労働省が受動喫煙防止対策強化に乗り出す！	……29
▽予防会だより・シールだより	
○イタリアストップ結核パートナーシップ (Stop TB Italy) 事務局長ダニエラ氏来日	……24
○東京都支部と連携して江戸川区民まつりに参加	齋藤 隆則……25
○あなたの肺は何歳？	
COPD認知率向上のために、今年度に結核予防会が行ったイベント	佐藤 利光……26
○平成28年度ブロック会議の開催	……27
○顔の見える連携—第2回複十字病院地域交流会開催	……27
○平成28年度『診療放射線技師研修会』仙台開催のお知らせ	……28
○共感を寄付に繋げる	
—複十字シール運動担当者会議報告—	久保田登子……30
○明治村における「結核との闘いの歴史展」のご案内	尾高 恵……30
○結核研究所 セミナー・会議予告	……32
○結核予防会海外事務所から Happy New Year 2017 !	
○国際結核肺疾患予防連合アジア太平洋地域学術大会 (APRC2017) 準備委員会だより No.10	

〔表 紙〕「上空から望む富士山」
撮影者：堀川春男氏



新春ご挨拶 2017

アジアと世界の結核の抑制なしには 日本の結核はなくならない

公益財団法人結核予防会

理事長 工藤 翔二



明けましておめでとうございます。

東京オリンピックまであと4年。といっても、スポーツの話ではありません。日本の低蔓延国を実現する目標年2020年のことです。日本の結核罹患率は、2015年に10万対14.4にまで低下しました。しかし、外国出生者の結核は、毎年1,000名超を更新し続け、20歳代ではついに過半数（50.3%）となりました。「アジアと世界の結核の抑制なしには、日本の結核はなくならない」、そのことが一層現実感をもってきました。

昨年10月にリバプールで開かれたUNION 2016に参加してきました。世界125カ国から3,000名を超える参加者を迎え、900演題を超える発表がありました。今回、本会は伝統あるStyblo賞を頂きました。ワークショップでは、結核を1970年代に毎年10%台で低下させた日本の報告に、各国の参加者から大きな関心が寄せられました。また、過去50年以上にわたって、延べ2,300名を超える卒業生を生み出した結核研究所のJICA国際研修の卒業生によるAlumniパーティー（同窓会）では、予防会の歴史の重みと継続の大切さを感じることができました。もう一つ、今回のUNIONで感じたことは、新しい抗結核薬と検体検査技術、放射線診断技術（CAD）などの開発競争が本格化していることです。まったく新しい抗結核薬だけを組み合わせたUniversal TB regimenの提唱など、昨年のケーブタウンでのUNION 2015よりも、さらに進んでいます。結核研究所は、新進の研究者を新たに迎えて、こうした世界的視野に立った結核研究の推進に力を注ぎます。私達は、この3月22～25日、東京で開かれるアジア・太平洋結核及び胸部疾患会議（APRC）の成功に向けて、準備を進めています。春にはカンボジア保健科学大学との共同で進めている「カンボジア健診・検査センター」がオープンします。

本会の事業は結核だけでなく、国民の命と健康を守る幅広い分野におよんでいます。健診事業は、健診項目の統一・判定基準の統一・健診結果の中央管理という、総合健診推進センターが進めている本会ならではのネットワーク健診を強化して、糖尿病をはじめとする国民の生活習慣病の予防のために、日々の業務を行っています。ご承知のように、日本の健診は戦前からの結核検診に始まります。胸部の健診は、本会の健診事業の原点でもあるのです。昨年、本会胸部X線検診、低線量CTによる肺がん検診、スパイロを使ったCOPD検診を包括した『総合胸部検診』のあり方を纏めました。今年は、700万人にも及ぶ胸部X線検診について、平成17年以来10年ぶりの調査を準備します。全国支部のみなさんのご協力をお願いします。

事業規模の上で、本部事業の大部を占める複十字病院と新山手病院の病院経営は、2025年に向かう地域包括的ケアにもとづく地域医療再編のうねりの中で、大きな試練に立たされています。複十字病院は過去6年間、黒字経営を続けてきましたが、近い将来の本館建替事業を控え、昨今の医療状況からみても油断できない状況にあります。また、新山手病院は、新館建替後に伴う継続的な赤字経営からの脱却が喫緊の課題となっています。地域の皆さんの期待に応える医療体制をつくりあげ、病院経営を守っていきましょう。

本会の事業は創立以来、昨年纏められた『証言で綴る結核対策＝公衆衛生の歴史』にみるように、国民に支えられて今日があります。昨年の「結核予防週間2016」でも、全国で一斉複十字シール運動キャンペーンが行われ、本部、支部の多くの皆様のご協力を頂きました。昨年、本部では「募金推進部」を発足させました。2017年は、正念場の年となります。みなさん、一緒に頑張りましょう。🐱



新春ご挨拶 2017

平成29年新春にあたり

新年明けましておめでとうございます。

昨年は北海道新幹線が開通し、本州と北海道が新幹線で繋がりました。

また、プロ野球「北海道日本ハム」が日本一を達成し、さらに、サッカーでは、「北海道コンサドーレ札幌」がJ1昇格を果たしました。地元北海道は大いに盛り上がり、久しぶりに活気づいた年となりました。

反面、夏に台風が連続して北海道を通過し、大きな爪痕を残していきました。いまだにJR線や国道は全面復旧しておりません。

このように、いろいろあった年でしたが、今年も日本ハムは連続日本一を達成して欲しいと願いつつ、一方で台風の襲来は御免こうむりたいと願うものであります。

さて、健診・保健事業に目を向けると、人口減少が

結核予防会事業協議会副会長

公益財団法人北海道結核予防会

なかい せいいち
理事 中井 誠一



進む中、競合団体との競争激化は避けられず、厳しい経営環境を迎えている支部も多いと思われます。

このような中で、先頃「総合胸部検診のあり方」検討委員会から「肺がん、COPD、肺結核検診の総合・効率化に向けて」報告がなされました。これは、結核予防会グループの経験を活かした事業展開の方向性を示していると思われ、実施に向けては体制整備が必要ですが、それほど難しい問題ではないと考えられます。

従前から実施している「ネットワーク健診」に加え、この「総合胸部検診」の導入を図るなど本部・支部が連携して取り組んでいくことにより、結核予防会グループが持続的に発展するよう期待するものであります。

最後に、皆様のご健勝とご発展を祈念いたしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。🍷

全国大会開催にあたり

新年明けましておめでとうございます。皆様方におかれましてはご健勝にて新春をお迎えの事とお慶び申し上げます。

昨年、北海道は過去にない豪雨の襲来を受け道東道北方面の農業、交通網に多大な被害が出ました。北海道は広域であり生活の基盤である交通網の支障は私達婦人会の活動はもとより全道民にとって大きな支障となり、早期復旧を願っているところでございます。

毎年開催されます「北海道家族の健康をまもる講習会」は本年第50回を迎える事になりました。省みますと第5回と第10回には結核予防会総裁秩父宮妃殿下のご臨席を仰ぎ開催されました。大変意義深く感慨深い思いでいっぱいでございます。

北海道健康をまもる地域団体連合会

さいとう よしこ
会長 齋藤 芳子



昭和52年結核から家族をまもるため、家庭婦人を中心に組織し設立された本会は、結核予防運動を中心に、その普及啓発のための複十字シール募金活動へと大きく発展して来ました。行政による市町村合併等や道民の健康づくりは、がん予防運動へと変容の兆しもありますが、「家族の健康をまもる」この基本的目的のため結核予防運動を中心に組織の充実に努力しているところでございます。

平成29年5月には、第68回結核予防全国大会が爽やかな五月晴れの北の大地で開催される運びとなっております。全国から多数の皆様をお迎えして結核予防のための実り多い大会になります様道民一同心から願っております。🍷

2017年アジア太平洋「肺の健康」学会ハイライト

第6回国際結核肺疾患予防連合アジア太平洋地域学術大会

大会長 森 亨 (結核研究所名誉所長)



国際結核肺疾患予防連合 (Union) アジア太平洋地域 (APR) は表記の学会を2年ごとに開催しているが、2017年は日本の結核予防会が当番になって、この3月(22~25日)に東京の国際フォーラムで開催されることはこれまでも本誌にも報じられてきたところである。開催体制の整備、スポンサーの依頼、会場の設営などと並行して、肝心の中身(出し物)についてもこれまで鋭意準備を進めてきたが、テーマや演者がほぼまとまったので、ここに概要を紹介し(表)、その中

からいくつかをハイライトしてみたい。なお、これらの企画にあたって私たちが目指したのは、①名実ともに「アジア太平洋」の会とするために、演者は極力APRの国・地域の人に限定、②WHOの唱える2015年以後の対策「結核終息戦略」に沿ったテーマを重視する、③同時同会場で並行開催される日本結核病学会総会(会長: 斉藤武文国立東茨城病院院長)との交換体制、④市民公開、関連団体との共同開催を取り入れる、などである。

表 セッション一覧

全体セッション【講演】

1. 有病率調査
2. 自然免疫
3. WHO西太平洋地域におけるポスト2015グローバル戦略
4. 結核の研究課題(英語/日本語)
5. 温故知新(英/日)

シンポジウム(番号はほぼ開催日時順)

1. 移民の結核予防とケア
2. 慢性閉塞性肺疾患(COPD)/リハビリテーション
3. 新規結核ワクチンの展望
4. ハイリスクグループの結核患者発見
5. 小児結核: 疫学と予防
6. 肺がん
7. 肺繊維症
8. アジア太平洋におけるユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)の進捗
9. 接触者健診の強化
10. 肺炎
11. 潜在性結核感染症の治療: 期待と実現可能性
12. 多剤耐性結核: 疫学/管理
13. 喘息
14. 有病率調査
15. 患者中心の結核ケアとサポート
16. アジアにおける分子疫学の現状
17. 新薬, 新しい治療法
18. 結核対策におけるインターフェロン γ 遊離試験(IGRA)
19. 結核対策: 法制化と政治的関与
20. 薬剤監視・副作用管理
21. 高齢者と免疫力低下患者における結核
22. ウイルス感染流行(MERS・インフルエンザ・

SARS)

23. 宿主要因・遺伝とバイオマーカー

講演

1. アジアにおける結核/HIV
 2. 社会決定要因への取り組み
- 開会講演: アジア太平洋地域における肺の健康

共同企画

1. アジア太平洋婦人会セッション: 結核対策におけるNGOの役割
2. 日本結核病学会共同企画 細菌学的結核診断の強化

市民公開講座

1. 結核患者への禁煙プログラム
2. たばこのない東京オリンピック・パラリンピック2020開催に向けて

ワークショップ

1. Union倫理委員会による医学研究倫理
2. 多剤耐性結核の治療(プログラム管理)
3. 結核伝播のモデリング
4. 結核診断ネットワークの強化

卒後研修コース

1. 科学論文の書き方
2. 論文データベースとコクラン共同計画の活用方法
3. 結核菌分子疫学入門

このほかにランションセミナー、イブニングセミナー、口演(ポスター応募者の中から選抜された演者による)がそれぞれ数セッションずつ、もちろんポスター展示・討論も予定されている。

全体セッション講演

1. 有病率調査

カンボジアの結核対策の技術協力の中で日本のチームが実施した結核実態調査（有病率調査）はその意義が全世界的に認められ、いまやアフリカをはじめ世界中で盛んに行われている。その結果従来モデルにより推定されるだけであった途上国の結核問題の現状認識は大きく変わっている。この動きのパイオニアであり、今はWHOの調査推進チームの責任者として活躍している小野崎博士による講演。この講演とやらんで、当事国の担当者らによるより生々しい経験と新課題の提唱と討論がシンポジウム14で行われる。

2. 自然免疫

日本結核病学会と共同のセッション、結核病学会が招請された、米国でこの分野では著名な専門家Koziel博士の講演に共に学ぼう、という企画。自然免疫の問題は結核の分野においてもその意義が改めて注目されるようになってきており、Koziel博士のグループは特にビタミンDと結核に関して先駆的な業績を上げている。

3. WHO西太平洋地域におけるポスト2015グローバル戦略

世界を6分割するWHOの地域割りの中で、当Unionのアジア太平洋地域の国の大半が所属する「西太平洋地域」（地域事務所はマニラ）は結核の罹患率はアフリカ、南東アジア各地域に続いて3位、発生患者数も南東アジア、アフリカに続いて3位、全世界の25%を生み出している。しかし対策の努力については世界をリードしており、先年までの「ミレニアム開発目標」の達成、それに伴う「世界ストップ結核戦略」においてもひとり目覚ましい成果を挙げた。マニラの地域事務所の結核・ハンセン病根絶調整官としてこの戦略の指揮にあたっているのが、講師の錦織信幸博士である。博士のチームはWHO本部がポスト2015年戦略を発表するや、西太平洋地域版（Regional Framework）を立案、その実施に入っている。講演ではこの地域戦略の背景、狙い、要点、課題を解説していただき、我々の今後の活動の中でこれにどのように協調すべきかの示唆を期待したい。

4. 結核研究の課題

「結核終息戦略」にみるように、対策の推進のためにさらなる対策技術の開発・援用は必須ということで、結核研究の重要性はますます高まっている。その在り



方について、広い視野と深い見識をもった先達の声に耳を傾けることは意義が大きいことであろう。今回は碩学・香港中文大学Yew WW博士を招請して蘊蓄をうかがう。2010年の日本結核病学会総会の招請講演で博士の学識に触れられたかたも少なくないのでは？

5. 温故知新

上記の研究の将来展望とは逆に、古きを恩（たず）ねて新しきを知る、ことも同時に大切、と我々の大先輩の島尾忠男先生（本会名誉顧問）をお願いして結核対策・研究の来し方からこの先を占っていただく。1940年代以降、近代的結核対策の導入以来のほぼ全時代を実体験でカバーする先生の研究歴にもとづく語り

講演・シンポジウム

1. アジアにおける結核/HIV（講演1）

結核発生のハイリスク集団への集中傾向の典型例としてHIV感染者の問題がアフリカでは深刻な問題となっているが、アジアでも一部の国や地域では深刻な状況である。アジアの結核・エイズ問題に早くから取り組んできたタイのCharoen博士から、タイを中心とした結核エイズ問題へのかれこれ30年になんなんとする取り組みについて振り返り、今後の展望を語っていただく。

2. 社会決定要因への取り組み（講演2）

結核は感染症であることはもちろんだが、発生か

ら対策について非感染性疾患としての特質、さらにもっと広く社会経済要因が密接に関連する問題であることが重視されるようになった。これについては香港で結核患者の診療の傍らで関連の論文を多数発表されているLeung博士に整理をしていただき、議論を深めたい。

なお、このような視点から本学会ではシンポジウムでつぎのような関連のテーマで討論を行う。移民の結核予防とケア（シンポ1）、ハイリスクグループの結核患者発見（シンポ4）、接触者健診の強化（シンポ9）、高齢者と免疫力低下患者における結核（シンポ21）

3. 結核対策：法制化と政治的関与（シンポ19）

結核対策が世界の政治課題として国連の高級レベル会議で取り上げられることになったとは最近のニュースにもあるが、今学会でもこの観点からこのようなセッションを企画し、日本他いくつかの国の国会議員レベルの演者を依頼している。

なお、関連のテーマとして、結核終息戦略でも取り上げられ、また上記シンポジウムでも話題となるユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）には別途シンポジウムでも取り上げる（シンポ8：アジア太平洋におけるUHCの進捗）

4. 患者中心の結核ケアとサポート（シンポ15）

結核終息戦略の中では「患者中心」がキーワードとなっているが、具体的には結核の治療におけるDOTSの質的確保の条件としての具体的な患者の支援がますます重要になっている。現場でその活動を担っている保健師が、異なる条件下での活動の経験にもとづいた議論をし、今後への展望を探る。なお、医療技術の面から、シンポ20では薬剤安全監視・副作用管理を取り上げる。

5. 残された課題

「低蔓延化」という量的な課題とは別に、結核問題の質的解消に関して「小児」「女性」「多剤耐性結核」等はますます緊急の課題になっており、終息戦略でも注目されている。本学会ではシンポ5で「小児結核：疫学と予防」を、さらにシンポ12で「多剤耐性結核：疫学・管理」を取り上げる。

6. 新たな技術の開発と援用

ポスト2015の野心的な目標を達成するためには、そして日本のアクションプランに掲げられた2020

年までの低蔓延化のためにも、新しい技術、新しい方策の開発・援用が必須である。これらについては、まず、日本結核病学会との共同企画で「細菌学的結核診断の強化」（必ずしも全部が「新技術」というわけではないが）、日本結核病学会との共同企画で「細菌学的結核診断の強化」と題して、新たな技術を含む診断技術の効果的利用について検討する。

他にはいくつかのシンポジウムがこの分野をカバーしている。まず「インターフェロン遊離試験」（シンポ18）でこの新技術の途上国を含めた状況の効果的な利用法を検討し、さらに従来、先進国だけで、かつ限定的に行われてきた潜在性結核感染症の治療について、そのより広範な使用の拡大への「期待と実現可能性」（シンポ11）を検討する。

さらに近未来の対策技術の開発を目指して、以下のようなテーマがシンポジウムに取り上げられている。新規結核ワクチン（シンポ3）、新薬及び新しい治療方式の開発（シンポ17）、宿主要因研究とバイオマーカーの発見（シンポ23）、分子疫学からみたアジアの結核（シンポ16）。ワクチンに関しては日本発のワクチン戦略（BCGを凌ぐ予防ワクチン、多剤耐性結核治療用ワクチン）が含まれる。デラマニドやベダキリンのような新薬の使用方式の確立、さらなる新薬と薬剤組み合わせ方式の開発もますます現実の課題となっている。バイオマーカーの研究は新たな診断・治療とくに宿主中心治療に向けて目が離せない。

7. 非結核系呼吸器疾患

これについては以下のような疾患と課題を取り上げ、アジア太平洋地域からの視点で討論を行う準備を進めている。肺がん（シンポ6）、慢性閉塞性肺疾患（COPD）／リハビリテーション（シンポ2）、肺繊維症（シンポ7）、肺炎（シンポ10）、喘息（シンポ13）、ウイルス感染流行（MERS・インフルエンザ・SARS）（シンポ22）。

タバコ対策関連（市民公開講座）

これについては2つのセッションを用意し、とくにできるだけ多くの日本人の参加者に期待して、同時通訳つき、かつ登録を必要としない、一般の方々の参加を歓迎するセッションとした。とくに1には日本の看護師・保健師の皆様の参加を歓迎したい。

1. 講習会：結核患者への禁煙プログラム

喫煙は結核感染や発病を促し、治療を妨げ、生命予後を悪くするとされ、さらには本人のみでなく、家族・友人をも巻き込む。このような観点からUnionは結核患者と家族の禁煙を推進する「ABCプログラム」を開発し、いろいろな国で普及活動を行ってきた。これを今回は日本はじめAP各国に広めたいということで、地域事務局の専門家Bam氏が易しくノウハウを手ほどきしてくれる。なお、ABCとは①患者や家族の喫煙について尋ねる(Ask)、②DOTSや訪問の折に簡単な助言(Brief advice)をする、③具体的な禁煙の支援(Cessation support)を与える、の意味である。

2. シンポジウム：たばこのない東京オリンピック・パラリンピック2020開催に向けて

あと3年後に迫る東京オリンピック・パラリンピック、WHOもオリンピック開催都市には屋内の全面禁煙－受動喫煙のない環境を求めている、東京にも当然その要求が高まっている。しかしさまざまな抵抗がみられ、その実現は予断を許さない。このような状況に鑑みて、外国での経験や英知を集めて、東京、日本で受動喫煙完全追放の法規制実現を追求するための討論を展開する。

共同企画

日本の結核予防関連婦人団体連絡協議会との共同企画として、「アジア太平洋婦人会セッション：結核対策におけるNGOの役割」を開催する。日本のNGOとして結核予防を地域から支えてきたウーマンパワーが、この学会の機会にアジア各国のNGOに連携を呼びかけるために開催するもので、いくつかのアジア諸国からの代表を加えた討論会を行う。

ワークショップ

フロアからの参加を強めるために「ワークショップ」の形式で具体的なテーマを4点取り上げた。1. Union倫理委員会による医学研究倫理、2. 多剤耐性結核の治療(Programmatic management)、3. 結核伝播の疫学モデル、4. 結核診断ネットワークの強化。2は最近の新薬の援用と同時にいわゆるバングラデッシュ・レジメンのような薬剤組み合わせ方式の検討、さらに薬剤感受性検査の革新などを取り込んだ新

たな多剤耐性治療の方法を検討しようというもの。4は、WHOによる途上国の結核診断が従来の「喀痰塗抹」オンリーから、(簡易)拡散増幅法や培養、さらにはX線検査まで取り入れられるようになりつつあることから、その効果的な使用体系を「ネットワーク」というキーワードで構築しようというもの。

卒後研修コース(有料の講習会スタイルのセッション)

結核研究の基本的な方法論について、やや限定的に3課題と枠を絞り、内容の濃い講習会を企画した。

1. 科学論文の書き方

「見よう見まね」ではなく、先輩や成書から科学論文の書き方(ときに読み方も)を系統的に習った、という人は意外に少ないはず。一度系統的に学んでみると、これまでなぜ投稿論文がリジェクトされたかが、わかるかも知れない。講師は医学研究活動の大ベテラン貫和敏博博士(東北大学名誉教授、本会常務理事)。

2. 論文データベースとコクラン共同計画の活用方法

「証拠に基づく医学」の動きに火をつけ、油を注いだ「コクラン共同計画」、その動きの中で発展し、医学研究方法論として定着した感のある、体系的レビューとメタアナリシスの入門コース。講師陣は「コクラン共同計画」日本支部長の森臨太郎博士(国立成育医療研究センター部長)のチーム、インターネットを用いた立体的なプログラムなので、当日はパソコンを持参していただきたいとのこと。

3. 結核菌分子疫学入門

結核菌の構造・機能の分子レベルの理解は結核細菌学の常識となり、またその分子疫学は結核の病原体サーベイランス、いな、ひろくサーベイランス全体や疫学全般にわたって必須の情報になりつつある。これについて知識を整理し、アップデートしようというのがこの講座の目的である。講師は上海・復旦大学教授のGao Qian(高謙)博士。博士は結核研究所で行われている日中韓結核菌分子疫学研究プロジェクトの中国側代表の1人でこの分野の第一人者。🐼

[詳細・更新については公式ホームページを参照]

<http://www.aprc2017.jp/>

次世代の健康社会実現のための公衆衛生人材育成



大阪府藤井寺保健所

所長 谷掛 千里

取り組みが行われました。

今年4月には熊本で、本学会開催直前には鳥取での地震、台風10号を含む大雨の被害など発生し、災害時の公衆衛生従事者の人材育成も重要課題となっており、関連するシンポジウムでは会場から人があふれる状態となっていました。DHEAT構想が現在、全国衛生部長会より国へ要望され、国立保健医療科学院において今年度より災害時健康危機管理支援チームの教育が開始されています。

私自身が座長として担当した第12分科会の感染症示説では、結核発表のみでしたが、結核遺伝子型別解析(VNTR)の活用に関する演題が多く発表されていました。それ以外にIGRA検査の精度としてのデータ解析結果、BCG個別接種に係るコホ現象対応のマニュアル作成や感染症診査協議会統合後の考察、ストップ結核パートナーシップ活動報告と課題、服薬開始者への服薬終了者からのメッセージ集の作成など10演題でしたがバラエティに富んだ内容となっていました。

平成26年3月より日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会が設置され、12分野11グループのモニタリングが開始されています。特別報告として①疫学・保健医療情報、保健行動・健康教育分野、②健康危機管理、保健所・衛生行政・地域保健分野、③障害児者の医療と福祉分野の3つの報告がありました。フロアよりTPP等社会情勢による公衆衛生への影響なども研究してほしいとの発言がありました。

大阪府保健所や大阪府庁の職員、府内の保健所設置市保健所職員等大阪の行政職員の発表や、産官学の連携含めての発表もあり、公衆衛生は様々な方々の活動で成り立っており、さらに、地域の生活全般含めての活動が必要であることを再認識する機会となりました。

最後に、無事盛大に開催でき、事務局の阪大含め大阪府、大阪市の皆様のご尽力に感謝申し上げます。🐼

第75回日本公衆衛生学会総会が平成28年10月26日から3日間、緒方洪庵の適塾がある大阪市で20年ぶりに大阪駅から直結のグランフロント大阪中心に、全国発の医学部の公衆衛生学教室を設置した大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生学教室の磯博康教授を学会長として、「次世代の健康社会実現のための公衆衛生人材育成」をテーマに盛大に開催されました。特別講演・報告5題、教育講演10題、シンポジウム41題、ランチョンセミナー17題、市民公開講座等、演題総数1,817題、61自由集会と過去最大規模となり、全国から総会約4,300名、市民公開講座約500名と大変多く参加いただきました。

学会長講演で全世代の健康増進や疾病・健康障害の予防、医療・福祉の充実が求められている中、公衆衛生人材の育成と確保は大きな課題であり、「大学や学会がプラットフォームとなり、人材育成を指導していかなければならない」と述べられました。現在、本学会を含む11団体で社会医学系専門医協議会を立ち上げ、専門医制度の準備が進められており、シンポジウム等活発な討論がされました。大阪は特に保健所設置市が多く、現在、政令市含めて6市、平成30年度には2市、平成31年度には1市が中核市になることを表明しており、中核市の人材確保を含む育成のシンポジウムも開催されていました。

若手の公衆衛生人材育成のため、40歳以下の会員に対して、口演賞(10題)、ポスター賞(42題)を選出し、口演賞受賞者10名は初日の午後に最優秀口演賞1題、優秀口演賞3題を選出するという初めての

結核集団発生対策に関する自由集会に参加して

結核予防会結核研究所

保健看護学科 島村 珠枝



第75回日本公衆衛生学会初日の10月26日にCIVI北梅田研修センターで、結核集団発生対策に関する自由集会を開催しました。113名もの方にご参加いただき、活発な意見交換が行われました。

事例報告

①麻雀店常連客からの結核集団事例

(大阪市保健所 清水直子 保健師)

13カ月もの長期間咳症状があり、毎日7時間麻雀店を利用していた事例。従業員と常連客、19名中11名がQFT陽性（うち1名発病）、接触者健診対象外からも二次患者2名の発生がVNTRで特定されました。接触時間の長さ（特に200時間以上）、麻雀の対局がQFT陽性に有意に関連していました。遊技場での接触者の聞き取りは困難が予測されますが、担当者が店長に対し厳しく追求し、新たな接触者が明らかになるなど担当者の熱意を強く感じました。この事例では、店長が初発患者の咳に気づき、マスクの着用を促していたにも関わらずマスクは着用されませんでした。換気は1時間に2回程度と少なく、かつ喫煙率80%という状況での長期間の接触が集団感染につながりました。遊技場への対策を考えさせられる一方で、接触者健診の結果を丁寧に分析していくことで、対策の課題が明確になり効果的な提言が可能になることを感じました。

②最近の集団感染事例より～渋谷区～

(渋谷区保健所 前田秀雄 所長)

今年4月に大きな話題となった警察署における集団感染事例。初発患者は留置当初より咳・痰の症状があり、約3週間後に呼吸状態悪化のため病院に搬送、肺炎の診断で死亡。後に剖検の結果、結核死と報告されましたが、届出はありませんでした。1年後に発病した警察署員の接触者調査で結核死した拘留者の存在が明らかになり、接触者計185名の健診を実施。発病

者11名、IGRA陽性者24名の大規模な集団感染となりました。施設や医療機関での診療の際や検案・剖検時、報告時の結核についての認識不足に加え、初発患者に対する「存在の耐えられない軽さ」があったのではないかと指摘に強く心を動かされました。事例のディスカッションでは、過去にも剖検での感染事例があり、関連学会等での提言が必要等の意見が出されました。

事例報告の後、結核研究所森名誉所長より、健康管理が行き届いていない人々への啓発は難しいが健診のフォローアップはしっかり行っていく必要があること、また感染リスクの時間の考え方について助言がありました。また、結核研究所石川所長より、「刑事施設における結核対策の手引き」の紹介と、集団感染事例を契機に関連機関とつながりを持ち、前向きに介入していく必要があるとのコメントがありました。

今回ご発表いただいた2事例を通し、関係者の皆様の熱意に心を打たれるとともに、今後の結核対策への示唆を得ることが出来、非常に有意義な時間となりました。ご発表いただいた清水様、前田先生、世話人および座長をお引き受けいただいた大阪府柴田敏之先生、また、準備に多大なるご協力をいただいた大阪府中様、山内様に心より御礼申し上げます。🐾



大勢の方が参加され盛り上がった自由集会

長崎県立大学シーボルト校

看護栄養学部看護学科

地域看護学 講師

濱田 由香里

長崎県の結核の現状

平成26年の長崎県の結核罹患率は22.1であり、全国平均15.4と比較すると47都道府県中2番目に高い罹患率である。また、新登録者中65歳以上の高齢者割合は73.6%と全国平均69.8%と比較して高く、合併症や副作用、自己管理不十分、認知症や身体機能低下に関連した問題等が想定され、長崎県において、結核対策は重点課題のひとつである。

「地域DOTS」における服薬支援体制の充実が期待される中、筆者が保健所に勤務していた平成24年12月時点での長崎県では、「薬局DOTS」も含め、保健行政システムとして保健所以外の「地域DOTS」の取り組みは実施されていない状況であった。そこで、今後行政が薬局DOTS導入に向けた検討を行うため、薬局開設者を対象とした自記式質問紙調査によるニーズ調査を実施し、その結果を基に薬局DOTS事業を開始した。今回はその取り組みの一部を紹介する。

薬局DOTS展開に対するニーズ調査

平成25年3月～4月の期間に、長崎県内にて「薬局」と登録される745店舗のうち、県知事より「結核指定医療機関」の指定を受けている533店舗の開設者（概ね薬剤師）を対象とし、郵送法による自記式質問紙調査を行った。（図）

内容は、1）回答者の属性（性別、年齢）、2）薬

図 長崎県内の薬局の状況

長崎県内745箇所の薬局中、結核指定医療機関は533箇所（71.5%）

結核指定医療機関 533箇所		結核指定医療機関 533箇所中の割合
「基準調剤加算1」	有り	287箇所（53.8%）
「基準調剤加算2」	有り	48箇所（9.0%）
「地域医療連携体制」	有り	330箇所（61.9%）

局関連情報（所在地、開設時期、勤務薬剤師数、他職種数、結核患者支援経験の有無等）、3）過去の結核関連の講習会・研修会・学会参加経験の有無、4）DOTSの認知および薬局DOTS協力意向や薬局DOTS研修会参加意向、5）薬局DOTSを実施する場合の課題や必要条件に関する質問等である。薬局所在地について、離島地区ならびにDOTSの実施単位である本土の保健所管轄別7区分にて回答を得た。

DOTSの認知に関する質問では、「あなたはこれまでにDOTSという言葉を目にしたことがありますか？」という質問に対して、「はい」と回答した者を「DOTS認知有」、「この調査で初めて知った」者および「目にしたことがない」と回答した者を「DOTS認知無」に分類した。薬局DOTSの認知についても同様に分類した。「薬局DOTS協力意志」については、「はい」「条件付き可」を「意志有」、「いいえ」「わからない」を「意志無」に分類した。「薬局DOTS研修会参加意志」についても同様に分類した。

「薬局DOTS協力意志」および「薬局DOTS研修会参加意志」に関連する要素について、 χ^2 検定により分析し検討した。

回収された233件（回収率43.7%）のうち有効回答が得られた212件（有効回答率39.8%）を分析対象とした。

〈用語の定義〉

「基準調剤加算有」の薬局

医療用医薬品だけでなく、一般用医薬品等についての薬剤服薬歴管理も行っている等の厚生労働大臣の定める基準（「特掲診療科の施設基準等」）に適合しているものとして、地方社会保険事務局長に届出を行った薬局とした。

「地域医療連携体制有」の薬局

医療機関と連携し在宅医療に取り組んでおり、地域住民に対して、薬の特性や適正使用等に関する講習会等の啓発活動に参加している薬局である。

【結果】回答者の属性は男性が約8割、薬剤師免許は有効回答200件中173人(86.5%)が有りと回答した。

〈薬局DOTS協力・研修会参加の意向〉

「薬局DOTS協力意志」の「意志有」と回答した者は「条件付き可」と回答した者も含め92人(43.4%)であった。「条件付き可」と回答した者の具体的条件の内訳は、「薬局の人員が充足していること」、「事前に研修を受講すること」「薬局からの距離や時間」であった。「薬局DOTS研修会参加意志」の「意志有」と回答した者は「条件付き可」と回答した者も含め127人(59.9%)であった。「条件付き可」と回答した者の具体的条件の内訳は、「開催時間(土日や夜間であること)」、「薬局の人員が充足していること」、「開催場所(離島地区での開催なら参加可能)」であった。

〈薬局DOTSの課題や必要条件〉

181人から有効回答が得られ(複数回答)、「結核に関する知識や情報」117人(64.6%)と回答した者が最も多く、次いで「薬局のマンパワー不足」96人(53.0%)であった。

〈「薬局DOTS協力意志」および「薬局DOTS研修会参加意志」の関連要素〉

「薬局DOTS協力意志有」に統計学的有意に関連していたのは、薬局の「基準調剤加算」($p=0.001$)、「地域医療連携体制」($p=0.018$)、「DOTS認知」($p<0.001$)、「薬局DOTS認知」($p=0.005$)、「学会・研修会参加」($p<0.001$)、「結核患者支援経験」($p=0.001$)有りであった。

また、「薬局DOTS研修会参加意志有」に統計学的有意に関連していたのは、50歳未満($p=0.001$)、「結核患者支援経験」($p=0.003$)、「学会・研修会参加」($p<0.001$)、「DOTS認知」($p<0.001$)、「薬局DOTS認知」($p<0.001$)、薬局の「基準調剤加算」($p=0.018$)、「地域医療連携体制」($p=0.002$)有りであった。

【結論】「基準調剤加算」および「地域医療連携体制」を有する薬局、50歳未満で、かつ結核関連学会などへ積極的に参加している薬局開設者の中から、今後薬局DOTSの協力が得られる可能性があると考えられた。また、行政が医療機関と連携し、研修会開催、ホームページにおける情報発信といった、結核や薬局DOTSに関する知識・情報提供の機会を増やし、十分な準備体制を整えることで、長崎県内の薬局DOTS展開可能性が期待できると考えられた。

県央保健所における薬局DOTS事業の展開

先の調査結果も踏まえながら、平成25年度に、長崎県県央保健所において薬局DOTS事業展開に向けた活動を開始した。

1. 薬局DOTS検討会の開催

事業開始にあたっては、管内の結核専門医療機関、県ならびに管内(諫早市・大村東彼地区)の薬剤師会の協力を得て検討会を開催した。

初回は薬局DOTS対象事例のイメージ共有や、薬局DOTS実施要領ならびに研修会の検討、事例検証等を行った。

2. 服薬支援者養成研修会の開催

管内の薬局薬剤師等を対象とした服薬支援者養成研修会を夜間の時間帯に開催。結核や治療に関する知識に加え、今後薬局DOTSを実施する際の協力薬局としての登録意向も確認した。本研修会がその後の協力薬局との連携の機会となった。

「薬局DOTS研修会」は管内の薬剤師会員等を対象にその後毎年開催され、地域DOTSの更なる患者服薬支援の強化と質の向上を図る取り組みが継続されている。

3. 薬局DOTSの実施

3事例から開始した薬局DOTSは、その後事例数も増えながら広がりを見せており、薬局薬剤師のコホート検討会への参画にもつながっている。

今後の展望

長崎県には「あじさいネット」という診療情報共有システムが存在する。これは患者の同意のもと、地域で発生する診療情報を複数の医療機関や薬局において共有されるもので、平成25年7月現在で約250の診療所・病院と40の薬局で利用できる。このシステムにより、薬局は的確で細やかな服薬指導が可能となり、今後利用可能な薬局が増える可能性は高い。

これまでの薬局DOTSにおいてもこのシステムは活用されており、今後はこのような医療と薬局の連携体制の整備・強化が更なる協力薬局の拡大と薬局DOTSの充実につながることも期待される。☺

参考：濱田由香里、他「長崎県における薬局DOTS実施可能性の検討」

日本公衆衛生雑誌 第63巻 第5号 P260-268

グローバルファンドの世界での結核対策への取り組み



世界エイズ・結核・マラリア対策基金

戦略・投資・効果局長 国井 修

G8 沖縄サミットを契機に2002年に創設された世界エイズ・結核・マラリア対策基金（以下、グローバルファンド）は、これまでに先進国ドナー、民間企業、財団などから300億ドル以上の資金を調達し、三大感染症の予防・治療を140か国以上の低中所得国で支援してきた。

これによって救われた命は2,000万人を超え、三大感染症の死亡・感染者数が半減する国も現れた。これにより、2015年までに結核を含む感染症の流行を低減させるという国連ミレニアム開発目標（MDGs）の目標6は多くの国で達成された。

三大感染症の中でも、特に結核対策におけるグローバルファンドの役割は大きく、国際援助の7割を占める。この支援を通じて診断・治療された結核患者は世界で1,500万人以上と報告され、2000-2015年の結核関連死亡の22%低減に大きく貢献した。

2016年に世界の新たな開発目標として合意された持続可能な開発目標（SDGs）の中で、結核を含む感染症は2030年までに「流行の終焉（End epidemics）」を目指すことになった。これは感染症対策の専門用語として用いる「根絶（Eradication）」や「撲滅（Elimination）」を意味するものではない。「公衆衛生上の脅威となるレベルの感染症流行を終焉させる」というもので、各感染症毎に具体的な指標と数値目標が設定されている。

結核についてはWHOの世界保健総会で合意された国際戦略「End TB Strategy」があり、2015年と比べ2030年までに死亡を90%、罹患率を80%低減するとの目標を掲げている。グローバルファンドもこれを支持し、WHO、Stop TBパートナーシップ、ドナー（開発援助国）、途上国政府、市民社会、民間企業などと協働して戦略と行動計画を策定している。

しかし、正直言って、これはそう容易に達成できる目標ではない。最近、WHOが発行した Global TB

Report 2016によると、2015年の結核による死亡者数は180万人。HIVとマラリアによる死亡者数の合計を凌ぎ、単一の病原体として世界で最も死亡の多い感染症となった。しかも最近の調査で、多くの国で実際の結核流行がこれまでの推計値よりも高いことが判明している。

結核の新規発症者数は世界的に減少傾向にあるものの、その減少率は年間1.5%程度に留まり、国際目標を達成するには2020年までに年率4～5%、2025年までには年率10%に加速化しなければならない。では具体的にどうすればよいのか。

目標達成に向けた第一の課題は、2015年1年間で世界で推定1,040万人もの新規結核発症者が発生しながら、半数以下の430万人しか診断・治療した報告がなされていないことである。発症しても医療機関を受診しない、できない、受診しても早期診断がなされない、できない、診断されても早期または適切な治療がなされない、また報告されない国が多いのである。

グローバルファンドでは、結核が蔓延する低中所得国に対し、まず結核に関わる有病率調査やサーベイランスを含む情報システムを支援することで、結核流行の動向の正確な把握、対策プログラムの効果のモニタリング・評価に貢献している。さらに、WHOを含むパートナーと連携しながら、国家結核戦略の改訂・改善、特に対策プログラムの予算配分に関する配分効率性（Allocative efficiency）の最適化などを支援している。グローバルファンドの資金を効果的・効率的に活用できていない国もあるため、WHOやStop TBパートナーシップと協働で対策室（Situation Room）を設け、プログラムが滞っていたらどのような支援をすればよいか、具体的な分析と介入を行っている。

さらに、ハイリスクでありながら、サービスが届かないホームレス、季節労働者、難民・移民、受刑者などに対するアウトリーチにも支援している。

発病者を早期に迅速に適切に診断し、効果的な治療につなげるためには、早期に迅速かつ正確に診断できる検査法の普及、質が確保された治療薬の安価で迅速・安定的な調達、適切な治療指針の普及と徹底などが重要である。グローバルファンドでは、国際医療品購入ファシリティ (UNITAID) や世界抗結核薬基金 (Global Drug Facility), WHOなどと協力しながら、これらの普及・拡大を支援している。

目標達成に向けた第二の課題として挙げるべきは、2015年時点で58万人と推計されている薬剤耐性、特に多剤耐性結核である。それらのうち診断・治療が報告されているのは2割の12.5万人程度、しかも治癒率は52%と極めて低い。薬剤感受性結核の6か月間の治療コストが一人当たり40ドル程度であるのに対し、多剤耐性結核については一人当たり2,000-5,000ドルと50-100倍の値段にもなり、貧困層には支払えない。

これに対し、グローバルファンドではリファンピシン耐性を短時間で検査できる新たな診断機器の導入・拡大、第二選択薬の迅速かつ安定的な調達・輸配送、新薬の導入・拡大などに大きく貢献している。

また多剤耐性結核は、感受性結核に対する不適切な治療や治療の中断などで起こるため、対策プログラムの質的改善も支援している。特に、多剤耐性結核が多く、技術レベルの低い国に対しては、Green Light Committeeと呼ばれるアジア、アフリカなど地域の専門委員会を活用して、現場における技術支援や能力強化を行っている。

第三の課題は持続可能性である。世界全体で結核対策資金は年間約20億ドル不足しており、最終的に援助から自立するためにも各国の自助努力が重要である。そのためグローバルファンドでは資金を割当てる際に、各国の国家予算から保健医療全体および結核対策に十分な予算が割当てられるための条件付けや財務省への働きかけ、各国での革新的な資金調達などを支援している。さらに、持続可能性を高めるには、結核に限定せず保健システム全体を強化することが必要で、人材育成、地域保健サービス、サプライチェーン管理の強化などを支援している。

最後に日本に対する期待を述べたい。

先日、グローバルファンドのダイブル事務局長を連れて日本を訪問した際に、結核研究所の石川所長のご

手配により、東京都新宿区保健所を訪問し、結核対策を視察した。そこでは、高齢者、外国人、ホームレスなどを抱え、日本で最も高い結核罹患率を有しながら、保健と医療と福祉を連携させ、地域や市民社会と連携しながら、それぞれの課題に応じた細やかな対策を行っていた。ダイブル事務局長はこれは世界の結核対策のモデルで、世界は日本から多くを学ばなければならないとの感想を私に伝えたが、私も同感だった。

日本はアメリカ、イギリス、フランス、ドイツに次いでグローバルファンドに対する世界5位のドナー国で、大いなる資金的貢献をしている。しかし、個人的にさらに期待したいのが、世界の結核対策に対する人的、知的、物的貢献である。

資金があっても効果的に結核対策を実施できない低中所得国が少なくないため、現場での人材育成や能力強化に対する技術支援が必要だが、世界的にみてそれができる組織・人が少ないのが現状である。日本には結核予防会や結核研究所など、日本国内での結核対策の実績・経験、またアジアを中心とした国際協力の実績・経験のある組織があり人材がいる、と私は思っている。

さらに、大塚製薬のデラマニド、栄研化学のTB-LAMP法、ニプロのジェノスカラーなど、日本発の新たな治療薬・診断機器が注目されている。グローバルファンドは研究開発には投資しないが、WHOが承認し、国からの要請があり、グローバルファンドの技術審査パネルを通れば、新製品を必要な国で導入・拡大できる。逆に、国際目標を到達するには、診断・治療・予防におけるイノベーションが切に求められており、グローバルファンドにその導入・拡大が期待されている。

ただし、これらの製品が世界に普及するには、他の競合製品などとの比較優位性が示されなければならない。特に、グローバルファンドでは、限られた資金で最大の効果（死亡の減少、感染の予防）を生まなくてはならず、効果、安全性、価格、操作性などの観点から国際市場でも優位に立てる製品が求められる。多くの国でその比較優位性が知られ、ニーズが出てくるには、企業だけでなく、官民産学の連携が必要だろう。

国際目標達成のため、日本の力を是非貸してほしい。

分子生物学的アプローチが世界の結核対策に貢献するという認識

結核予防会結核研究所

生体防御部長 慶長 直人



平成28年10月26日から29日まで、イギリスのLiverpoolで47th Union World Conference on Lung Healthが開催された。

Stop TB partnership, FINDによって、結核根絶へ向けて、LTBIの新しい診断法に関する報告がなされた。WHOのEND TB strategyのひとつのカギは、結核発病のハイリスク集団に対していかに効率よく予防的治療を施すことができるか、この難問にどう答えるかである。現行のIGRAではきわめて非効率であるという共通認識に基づき、菌が完全に排除されて感染リスクがゼロになれば陰性になる検査 (test for persistent infection) と、無症状で培養検査でも菌は検出されないが、すでに活動性結核発病への道を確実に進んでいる (subclinical active phase) 初期の結核を検出する検査 (test for incipient disease) の重要性が議論された (Esmail H, et al. The ongoing challenge of latent tuberculosis. Philos Trans R Soc Lond B Biol Sci. 2014のFigure 3bを参照)。特に感染後、発病に移行する可能性の高いハイリスク集団を検出するための検査として求められる要件 (target product profile ; TPP : 妥当な感度特異度の最低ラインで、陽性的中率は少なくともIGRAの2倍は必要という設定) を満たすべく研究が続けられている。RNA-seqという次世代シーケンサーを用いてRNAの発現プロファイルを分子生物学的に記録する手法 (結核研究所にも機器が導入されている) により、結核は、いわゆる発病の1年、2年前からsubclinicalに、健常人と異なる病理学的変化とそれに伴う血液の変化が現れていることが明らかになってきた (Zakら, 2016年, Lancet)。感度特異度は、理想からは程遠いものの、これまで報告された血液中のRNA発現様式の組み合わせだけでも、IGRAを目安に発病予測をするよりは、はるかにましであるという認識である。これらの試みは、これまで独立にsocietyを形成してき

たバイオマーカー研究グループの活動ともリンクするもので、今後の融合と発展が期待される。読者の参考のため、席上で紹介された主な研究論文を記載する。

Berry MP, et al. An interferon-inducible neutrophil-driven blood transcriptional signature in human tuberculosis. *Nature*. 2010; 466(7309): 973-7

Bloom CI, et al. A. Transcriptional blood signatures distinguish pulmonary tuberculosis, pulmonary sarcoidosis, pneumonias and lung cancers. *PLoS One*. 2013; 8(8): e70630

Anderson ST, et al. Diagnosis of childhood tuberculosis and host RNA expression in Africa. *N Engl J Med*. 2014; 370(18): 1712-23.

Sweeney TE, et al. Genome-wide expression for diagnosis of pulmonary tuberculosis: a multicohort analysis. *Lancet Respir Med*. 2016; 4(3): 213-24.

Zak DE, et al. A blood RNA signature for tuberculosis disease risk: a prospective cohort study. *Lancet*. 2016; 387(10035): 2312-22.

Esmail H, et al. Characterization of progressive HIV-associated tuberculosis using 2-deoxy-2-[(18)F] fluoro-D-glucose positron emission and computed tomography. *Nat Med*. 2016; 22(10): 1090-1093. 🐼

タバコと耐性菌に立ち向かう

第47回国際結核肺疾患予防連合（IUATLD）世界大会が英国のリバプール市にて開催された。リバプール市はイングランド北西部マージーサイド州の中心都市であり、かつてのイギリスの主要な港湾都市でもあった。リバプールと言えばザ・ビートルズを思い浮かべる人も少なくないと思うが、現在は市街の世界遺産を活かした都市構成にも力を入れている街である。



リバプール市の世界遺産群

Resistanceに込められた2つの意味：

さて今大会のテーマは“Confronting resistance: from fundamentals to innovations”である。Confrontは「立ち向かう」、そしてResistanceは「抵抗」また「抵抗勢力」を指すが、今回、Resistanceには2つの意味が込められている。

一つ目にはDrug-resistance、すなわち耐性菌である。つい先月、国連総会は抗生物質が効きにくいスーパー耐性菌を世界にとって深刻な健康上の脅威であるとの共通認識を示し、取り組みに向けた合意を発表した。これにおいて多剤耐性結核も同様に深刻な問題であることが国際社会においてははっきりと認識された。大会初日（25日）のWHOによるシンポジウムでも、特に多剤耐性結核対策では発見、診断、治療と複数のレベルにおいて理想と現実に大きな乖離があることが示された。26日のワークショップでは東欧及び中央アジアにおいて、多剤耐性結核の治療薬として使われる新規抗結核薬「デラマニド」及び「ベダキリン」へのアクセスと適切な治療の普及がまだ不十分であることが訴えられ、28日のシンポジウムでは移民や小児といった弱者に対する多剤耐性結核の様々な課題が指摘された。

二つ目には結核対策への「抵抗勢力」としてタバコによる健康被害を指している。勿論UNIONはこれま

結核予防会結核研究所

臨床・疫学部

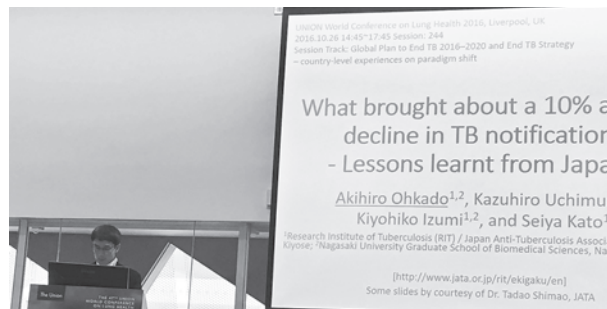
河津 里沙



でも喫煙対策に取り組んできたが、今大会では結核対策における喫煙対策の重要性がより一層に強調されたように感じられた。例えば27日の一般発表（口演、ポスター、eポスター）だけでも4つのセッションが設けられており、また28日には喫煙対策に関連した2つのシンポジウムが開催された。一つ目では政策レベルにおいてタバコの規制に取り組んできた事例が紹介され、二つ目のシンポジウムでは結核及びHIV/AIDS患者における喫煙対策を推奨する発表がされた。29日の口頭演題のセッションでは電子タバコに関する取り組みや様々な課題が取り上げられた。電子タバコに関しては健康被害や禁煙行動への影響などに関するエビデンスが十分に蓄積されておらず、今後も世界的な動向に注目していく必要がある。

結核予防会の活動：

今回の結核予防会関連の発表は口演が1件、ポスター及びeポスター（電子ポスター）が7件であった。また結核予防会主催のワークショップでは、結核予防会岡田国際部長が座長を務め、結核研究所大角臨床疫学部長がシンポジストとして日本における戦後の結核対策について発表した。ワークショップでは座りきれず会場の後方に立って聴講する参加者が多数おり、ディスカッションの時間には活発な意見交換が行われた。秩父宮妃記念結核予防功労賞世界賞はスーダンのアスマ・エル・ソニー医師に与えられた。またカレル・スティプロ賞は結核予防会が受賞した。



10月26日 ワークショップにて発表を行う大角臨床疫学部長

世界の結核制圧の柱は人材育成—我が国の役割と展望



結核予防会結核研究所

所長 石川 信克

結核予防会結核研究所が担当してきた国際研修は今年で、54年目であるが、その内容に関しては、30周年時、50周年時のまとめに詳しい。今回の本誌の企画は、それらを肉付けする意味で、裏話なども含め、設立当初から直接関わった方々の語り、研修担当者の説明や苦労話、帰国研修生からの寄稿等々、様々な貴重な証言集となった。これらも含め、私の経験も入れてまとめの解説をしてみよう。

結核研究所の国際研修は様々な点でユニークである。それらの中から6つの点を述べる。

1 結核予防会の人材育成へのコミットメント

単なる技術や知識の習得は予備校や会社のような組織でもできるし、1-2週間の短期の研修も可能であろう。結核研究所の国際研修コースは、当初は6カ月、最近までは3カ月間行われてきた。研修生は、技術や知識(What)を超えて、Why(なぜ、根拠)や基本原理を学ぶことができ、それが一生使える。これに加え、一人一人の研修生たちへのきめ細かい配慮があるために、本人の意欲や考え方に前向きの変化が起こる。これは結核研究所が培ってきた人材育成の姿勢に基づく。また研修生たちにとって忘れ難い経験は、結核予防会全国支部での受け入れや、本会総裁秋篠宮妃殿下のお茶会に招かれて励ましを受けることである。

2 各国のリーダー候補が日本の文化に触れ、そこで公衆衛生、結核対策を学ぶ

JICA研修が国のリーダーの養成を目指しているため、研修生は帰国後結核対策課長、保健省の局長などに昇進する人も多く、国の政策へのインパクトが大きい。これまでに保健大臣になった人も数名いる。本シリーズ(2)、(3)、(4)でもタイの保健省局長になったタビサク氏(第1回卒業生)、インドネシアの保健局長になったチャンドラ氏(第24回)、モザンビークの保健

大臣になったマンゲレ氏(第26回)らが、研修がいかに役立ったかを書かれている。日本文化や日本に対する認識も深まり、そういう人材が世界各地で要職についていることは意味がある。かつてインドネシアから来たある研修生が広島原爆記念館の見学に行った時、大声で泣いていた。彼が言うには、「自分は親から日本軍がどんなひどいことをしたかよく聞かされていたので、日本に対しては、わだかまりがあった。でも今日本の人もこんなに悲惨な目に会って苦しんだのだと知って、悪いのは日本人ではなく、戦争なのだ」と。また最近、若い中国の女医さんが言った。「日本人がこんなに親切な国民だということを、日本に来るまで知らなかった」と。

日本の公衆衛生に触れることも重要で、特に地方自治体や保健所見学などを通し、結核対策が国の隅々まで行われるための広い視野が養われる。また政府機関、行政のみでなく、開業医が対策の重要な役割を担ってきたことも公私連携(PPM)の実例として分かるし、さらに結核予防婦人会等の活動にも触れ、住民参加の実態にも触れる。

3 国際機関(主にWHO)との協力体制

早期からWHOとの協力体制ができたので、日本独自の成果に加え、国際的標準方式を学ぶことができ、国際講師たちとの触れ合いの中で、刺激を受ける。WHO以外にも、国際結核肺疾患連合(IUATLD)や米国CDCからの講師も参加し、コースのカリキュラムや内容の国際的な水準を保つためにも役立つ。各講師にとってもこのコースの有意義性が分かり国際的評判を上げることにもなる。2016年のIUATLDの総会(リバプール)で、本会が表彰されたのも、各国における研修卒業生たちの活躍が世界的に認識されたためである。

4 カリキュラムの継続的刷新

カリキュラムの変遷に関しては、本シリーズの(2)で山田紀男氏が記載しているが、変化する現場にニーズや国際戦略や技術革新、研修生個々の能力に応じて大幅に内容を変えながら、常時国際的にレベルの高い内容が維持されてきた。特に最近は、現場の問題を見つけ、解決するための能力向上に力点が置かれ、オペレーショナルリサーチ（OR）も重視されている。DOTS, MDGs, 最近はUHCなどの世界的戦略の速進にも焦点がおかれている。

5 国際プロジェクト（主にJICA）の現場との連携

教育を担当する我々も現場のニーズの変化に対応し、また結核対策の向上に必要な経験も必要で、JICA等のプロジェクトに関わる中で、その経験を積んできた。特に地域現場でのDOTSの実施、HIV感染者の結核、有病率調査の実施などの経験が大きい。またプロジェクトの現地側担当者が研修を受けることにより、日本および現地での共同作業ができるので、プロジェクト自身も効果が倍増する。

6 帰国研修生達のアフターケアとネットワーク

帰国研修生は既に97カ国、2,000名を超えるが、その半分は現在も結核対策ないし公衆衛生のリーダーとして活躍している。アフターケアとしては、まず、ニュースレターを年1回以上出して最新の知識を伝え、それぞれの経験を共有する場を作っている。また、世界各地で結核会議が開かれる時は、卒業生会を開催して意見交換をしたり、スタッフが出張する国に研修生がいる場合は、できるだけコンタクトをして意見交換をし励ます。秋篠宮妃殿下本会総裁が海外を訪問される時、ご都合がつけばその国の研修生達にお会いして励ましていただいている。この人材のネットワークは貴重で本会のみならず日本と世界を結ぶ貴重な財産でもあり、日本を愛し、日本を好きな人材がたくさんできることは、平和外交の推進にもつながる。

結核国際研修記念事業

2012年7月にJICA国際協力研究所で50周年記念事業（式典とシンポジウム）が結核予防会とJICAの共催で行われた。その内容は、本誌346号（2012年9月）に紹介されている。そのシンポジウムでは、「結核の無い世界を目指し、保健システム強化に貢献できる人材育成」の題で、演者はWHO西太平洋地域事務局医官大菅克知氏、研修担当者山田紀男氏、ウガンダとインドネシアからの帰国研修生ムガベ氏とチャンドラ氏、JICA磯野光夫氏、外交保健政策者武見敬三氏で、それぞれの立場から、これまでの研修の成果と今後の課題が熱心に語られ、本研修が今後も世界の結核対策の強化とともに保健システム強化にも貢献できることが確認された。（写真）

結核は単一病原菌で起こる最大感染症で、世界の重要な保健ニーズの一つであり、地道な長期の取り組み、そのための人づくりが必要である。それは保健システム強化の展望の中でさらに生かされる。人づくりは一朝一夕にはできない。これまで世界の保健人材育成に日本が果たしてきた役割は大きかったことを確認すると思に、今後も引き続きコミットすべきであると確信している。☺



結核国際研修50周年記念式典・シンポジウム

結核対策手法を保健システム強化に応用

スーダン疫学研究所
アスマ エル ソニー
所長 Asma El Sony



結核対策に従事する私の歴史は、1987年、清瀬にある結核研究所での結核研修から始まる。清瀬は小さな町だが、結核対策・研究において日本の中核を担っている。研修直後、私はスーダンの国家結核対策局長となった。研修では、疫学、結核統計、国家結核対策プログラムの強化方法について学び、青木、島尾、梅村、森、石川の諸先生、スティプロ先生など結核業界での名高い方々に教鞭していただいた。また研究所での研修は、以前カーディフ大学で博士号研修課程にて学んだ知識をより深めることにもなった。

WHOがアフリカで試験的に行ったDOTS戦略を世界へ広めるといふ結核対策における変革の時に私は結核対策に従事することになった。DOTS戦略は、世界の結核対策において、公衆衛生上のコミュニティアプローチを変化させただけでなく、膨大な公衆衛生課題に対して私たちはどのように考え、対策をしていくべきかという視点を与えたことが重要である。DOTS戦略は患者中心のアプローチであり、その5項目の一つの「記録と報告」は、特に患者の予後を確認するために非常に重要である。またDOTS戦略は結核対策への包括的なアプローチ手法でもあり、私が結核研究所で学んだことは、まさにこのことである。「受け持ち患者が何人いて、彼らがどうなったのか？」との問いに対して、DOTS前には答えることすら出来なかった。またスーダンでは、研修の講師であるエナソン先生が国家結核対策プログラムの技術助言役を務めて下さるという機会にも恵まれた。

私にとって、結核対策及び研究において日本の中核を担う清瀬での滞在は大変充実した日々であった。清瀬は自然が豊かであり、世界中の異なる国々から来た私たちを喜んで受け入れてくれる親切な人々、清瀬市民がいるこの素晴らしい土地で、いつも私たちをもてなして下さった。宿舎近くのご家庭からお茶に

ご招待いただいたことも忘れ難い。日本での経験と日本文化は、本当に素晴らしく、各所への視察も非常にありがたく思う。沢山のお魚を頂き、人生で初めてタコを食した佐渡島は、私のお気に入りである。

結核研究所での研修は、私にとって結核及び胸部疾患対策業務の始まりであり、習得した知識を実践出来るよう、全力を尽くした。その後、WHOの中枢部においては、クロウマン先生、エナソン先生、清田明宏先生をはじめとした皆様と、後に成功につながった結核対策プログラムを開始することが出来た。

また私はWHO国家結核対策プログラム局長として2002年1月27日には、国内全域でのDOTSを開始させ、国外の多くの国々の結核対策への技術支援も行った。WHOノルウェー胸部心臓協会、ノルウェー開発機構、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、中東の国々へのコンサルタント業務も行い、現在はWHOや世界基金を初めとした数々の団体のコンサルタントとしても従事している。

国際結核肺疾患連合（IUATLD）においても長期間にわたり活動をしており、理事会代表を務めた2002年から2007年においては、IUATLDの外部評価を支援するとともに、非感染症を含む公衆衛生及び胸部疾患対策への戦略転換を行った。

現在は、ノルウェーの胸部疾患患者協会とオスロ大学が2005年に共同設立した疫学研究所の所長を務めており、ここは結核、胸部疾患及びその他公衆衛生上課題の疫学に特化しており、結核のモデルを、その他公衆衛生上課題に対する保健システム強化の手法として活用することを目的として設立された。関連団体とともに、現在、政策変更への指南や持続発展性を確実にするための数々の研究に取り組んでいる。🐼

EMBO conference “Tuberculosis 2016: Interdisciplinary research on tuberculosis and pathogenic mycobacteria” に参加して

結核予防会結核研究所

抗酸菌部副部長 瀧井 猛将

この度、当会理事長工藤翔二先生からEMBO（European Molecular Biology Organization, 欧州分子生物学機構）Conference 2016参加する機会を頂きました。EMBOは毎年各地で生物学的研究の学会を開催しています。今回は結核と病原性抗酸菌をテーマにした会合を9月19日から5日間パリのパスツール研究所で開催されました。約600名の参加があり、ヨーロッパ、アメリカからの参加者が多く、アジアからはわずかでした。口頭発表64題、示説358題で盛況に行われました。特に口頭発表は厳選された高度で興味のある演目で構成されていました。後日、学会で発表された内容が著名な雑誌に掲載されているのをよく目にします。

今回の学会では結核菌の外膜のトランスポーターについて構造や機能について多くの発表がありました。その中でも特に興味を引いたのは抗酸菌同士を混ぜるとゲノム交換が起こる現象とそれに関与するトランスポーターの特定と機能解析でした。この発表は種の進化や薬剤耐性の伝播の研究に大きく影響を与える重要な研究だと思いました。今学会では通常の学会では珍しく各種財団の代表者が発表するセッションがありました。ゲイツ財団とWHOから2035年結核撲滅計画の説明があり、計画達成のために新たな診断技術、薬、ワクチンに関する“インパクト”のある提案に対して助成する方針を明言しました。このセッション後、“インパクト”という言葉が各演題の発表者がキーワードとして積極的に使うようになりました。

生化学、化学生物学のセッションでは結核抗原Ag85の基質としてトレハロース [F-18] を使ったPET/CTの発表があり、この方法は非常に感度が高く、また菌の代謝活性を見ることが出来ることから、診断や治療経過への利用が将来期待される内容でした。非結核性抗酸菌のセッションではアメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアから集めた*Mycobacterium abscessus* 1,086株を全ゲノム解析し、環境由来とヒト由来株間には5,000個の一塩基変位多型（SNPs）があること、ヒト由来株では20SNPsの緩いクラスターと

2 SNPsの親密なクラスターがあり、疫学的な解析から親密なクラスター内では直接的な感染が疑われるという発表がありました。このほかにもワクチンや治療薬の開発に関するセッションでも“インパクト”のある発表が数多くありました。

期間中にパスツール博物館を巡るツアーがあり、2階の展示室には教科書で見たことがあるパスツールフラスコやパスツールが使った顕微鏡などがところ狭しと並んでいました。（写真）パスツール研究所は過去に10名のノーベル賞受賞者を輩出しており、博物館にはメダルが展示されていました。これらの貴重な遺産を間近に見ることが出来てたいへん感動しました。続いてパスツール研究所の地下に入ると、そこにはひっそりとパスツールの棺が安置されており、私にはまるでパスツールが研究所を支えている、見守っているように思えました。棺を取り巻く4つ柱にはESPERANCE（希望）、FOI（信念（信仰））、CHARITY（慈善）とSCIENCE（科学）の各プレートを手にした天使像が描かれていました。この言葉には何か結核予防会の活動に通じるものを感じました。

今回の視察では細菌学研究の起源から世界の抗酸菌研究の現状を体感することが出来ました。そして、学会に参加して研究へのモチベーションが上がったことは言うまでもありません。とても貴重な機会を与えて頂いた工藤理事長に深く感謝申し上げます。🐼



貴重なパスツールフラスコや顕微鏡



胸部CT：どうして撮るの？



結核予防会複十字病院

診療主幹・放射線診断科長 黒崎 敦子

1. はじめに

胸部の画像診断シリーズと題して、1回目の胸部単純写真についてお話ししました。2回目はCTについてのお話です。

2. CTの特徴

胸部単純写真は身体を背腹方向に圧縮した重ね合わせ画像ですが、CTでは画像データを1辺が0.6mmの等倍サイズの小さなサイコロとして収集し、1-5mmの厚さの輪切りの画像に再構成して利用しています（当院の場合）。肺の中を1mm単位で見えていくことで、病変の局在や所見の詳細な把握ができます。

3. CTによる画像診断

肺の結節の画像診断についてお話しします。

CT画像から、病変の存在診断（本当に病変があるか）、質的診断（癌か炎症か）、病期診断（癌のステージ分類）が可能です。CTのデータは、1辺が0.5-1mmの等倍サイズの小さなサイコロと考えると、自由に縦横に積み上げることが出来るので、病変の位置、形、大きさを正確にとらえるのに適しています。

症例を見てみましょう。単純写真（図1）では左上肺野に結節（→）が疑われたため、CTが撮影され

ました。CT（図2a）では、結節の存在は明らか（存在診断）です。高分解能CT（図2b）で結節を詳細に観察すると、結節はほぼ球形を呈し、境界は明瞭かつ不整で分葉（1→）や小さな棘状変化（スピキュラといいます）があり（2→）、結節内部に気管支が見えます（気管支透亮像：3→）。画像上は肺癌と診断できます（質的診断）。さらに胸部全体を観察することで、リンパ節転移、肺や胸膜への転移、骨や他の臓器への転移の有無を確認し、癌としてのステージを判断し（病期診断）、治療方法の選択を行うことになります。

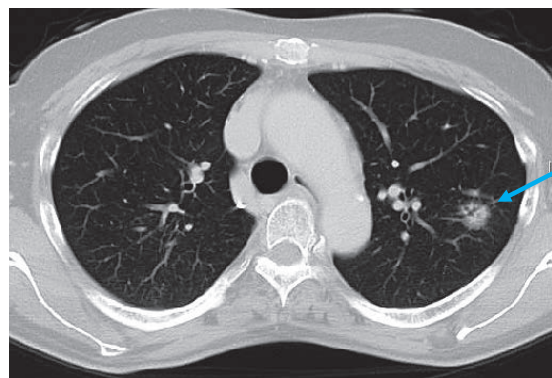


図2a

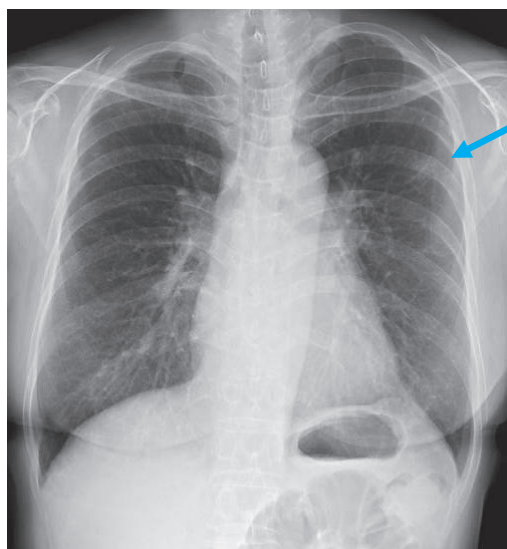


図1

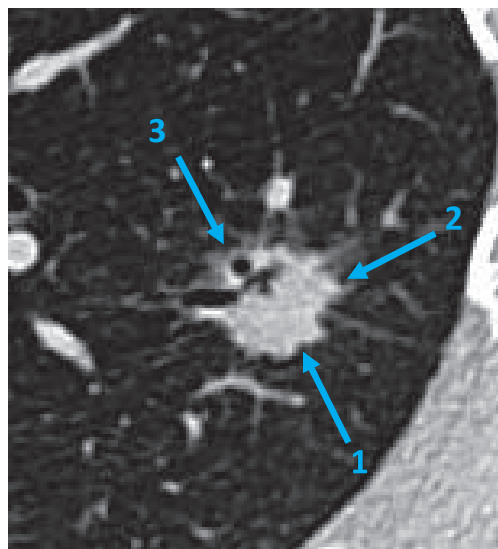


図2b

4. 治療方法選択への寄与

癌の診断・治療には組織診断が不可欠です。その一つの方法として、CTを撮影しながら病変に針を刺し組織を採取するCTガイド下生検が行われることがあります。

また、3Dワークステーションで目的に応じた画像作成をして、組織診断のための気管支鏡検査や、治療としての手術方法の決定に寄与します。

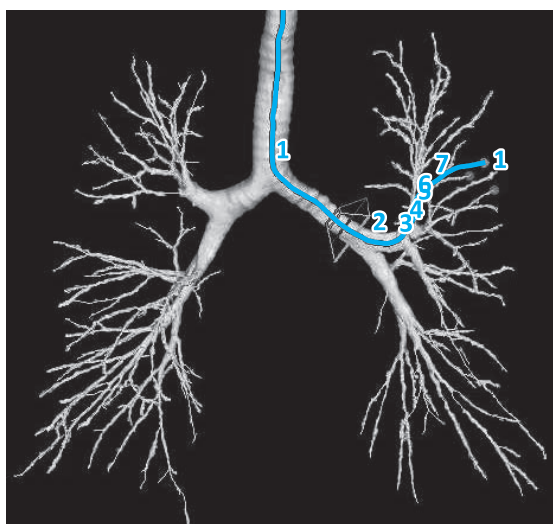


図3a

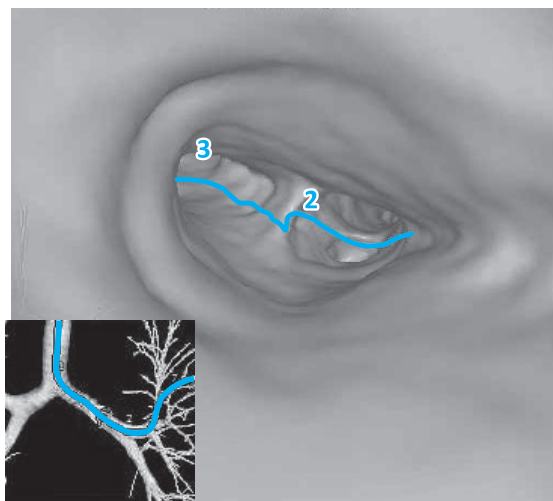


図3b

①気管支ナビゲーション (図3)

CTのデータから気管支像(図3a)を作り、仮想気管支鏡(図3b)で病変に到達する気管支を確認できます。実際の気管支鏡検査時にこの画像を参照することで、目的気管支への到達がたやすくなります。

②肺切除用3D (図4)

これは正面視した画像ですが、実際には自由自在にいろいろな方向にくるくる動かすことができます。肺癌(緑)と肺動脈(赤)、肺静脈(青)、気管支(薄緑)の立体関係が把握しやすいので、手術前に外科医が手術方針を決定する際に役立ちます。

以上のように、CTは肺に結節があるかどうか、結節は悪性かどうか、悪性(癌)の可能性が高いとしたら病理診断のための補助、悪性(癌)だとしたらステージ決定や治療方法の選択になくてはならない診断法となっています。

次の最終回では、複十字病院で行われている肺2大疾患CT検診(肺癌とCOPD)についてお話ししたいと思います。

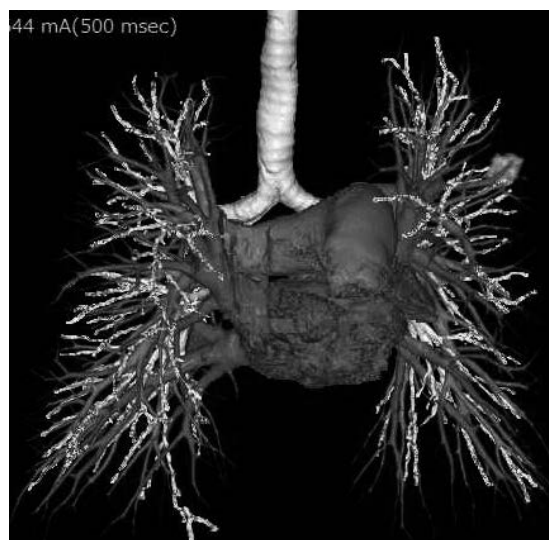


図4 実際の映像は肺癌(緑)、肺動脈(赤)、肺静脈(青)、気管支(薄緑)で確認することができる

結核対策の共同研究を目指して

結核予防会

事業部長 前川 眞悟

2012年に宮城県結核予防会から引き継いだ交流会議（2016年10月18日から22日）に出席のため、18日の午後、瀋陽市から遼寧省防痂協会理事・瀋陽市胸科医院副院長の孫团长をはじめ盧先生、張先生、また長春市から長春市伝染病医院の呉先生、鄭先生の5名が来日されました。一行は、成田空港到着後、水道橋に移動し夕刻より岡田国際部長をはじめ日本側と歓迎の夕食会を開催し懇親を深めました。

翌19日の第25回交流会議は、清瀬の結核研究所において午前10時より開会式を行い、結核予防会工藤理事長の挨拶に続き遼寧省防痂協会孫理事から挨拶をいただき、開会されました。

会議の内容は次のとおりです。

- 10:20～ 講演1「中国での耐性結核の現状について」 長春市伝染病医院 呉主任
- 11:10～ 講演2「抗酸菌感染症 新しい診断法の発達」 結核研究所 御手洗抗酸菌部長
- 13:00～ 複十字病院結核病棟視察
- 13:30～ 講演3「気管－気管支内膜結核における内視鏡治療の回顧と思考」
瀋陽市胸科医院 張主任
- 14:10～ 講演4「日本における肺結核の外科治療」
複十字病院 白石呼吸器センター長

講演後、「LAMP法研究結果報告と今後の共同研究」をテーマに岡田国際部長を座長に中国から5名の先生方、本会から工藤理事長、島尾名誉顧問、石川結核

研究所長、貫和常務理事、御手洗部長、白石センター長が、特別発言として複十字病院吉山結核センター長、栄研化学株野口中国事業室長が参加され、共同研究等、活発な意見交換会が行われました。最後に島尾名誉顧問が総括され、盛会裏に終了しました。

夕刻から水道橋に移動し、理事長招宴の歓迎会に参加され和やかなひと時を楽しめました。

20日は、朝から皇居や浅草を見物され、墨田川下りを楽しめました。午後から仙台市へと移動し宮城県支部の皆様から熱烈歓迎を受け交流を深められました。

21日の午前中は魯迅記念碑や青葉城址を見学後、宮城県支部複十字健診センターを訪問され、興生館所長の鈴木先生から「日本の結核対策」について講義があり活発な意見交換となり、充実したものとなりました。午後からは、東日本大震災の被災地である若林区荒浜地区を視察され、当時の状況をビデオで感じ取られておりました。視察後、東京に戻られて翌日の午後無事帰国されました。慌ただしい5日間でしたが、全員初めての来日とのことで貴重な経験であったと思います。

最後に本交流会議にあたり、宮城県支部の皆様、通訳の呉氏、齋藤氏、複十字病院伊先生、そして携わっていただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

また、2017年の第26回交流会議は、中国での開催予定となっておりますので、引き続きご支援、ご協力をお願いいたします。

研修生の受け入れ

それに先立ち、本会議の一環として瀋陽市胸科医院より国際研修「平成28年度UHC時代における結核制圧コース」（5月30日～7月29日）にChen医師を招聘し、中国の国レベルの結核対策を強化目的として研修を行いました。（本誌No. 371 p 28参照）



前列右より張慶氏、呉春氏、盧振春氏、孫穎氏、後列右より3人目 鄭永利氏

日中両国の専門家が手を携えて共に努力する

中国瀋陽第十人民医院

院長 孫 穎



孫穎院長（筆者）から宮城県結核予防会佐藤専務理事へ記念品贈呈

瀋陽市防痨協會は日本の宮城県結核予防会と1991年に友好関係を結んで以来、毎年1回中国の瀋陽と2010年までは日本の仙台で、2012年からは結核予防会本部と交互に『結核予防及び胸部疾病日中友好交流会議』を開催している。この友好交流活動は25年の長きにわたって続いてきた。2016年は東京において『第25回結核予防及び胸部疾病日中友好交流会議』が開催されることになり、瀋陽市胸科医院の孫穎院長を団長に、瀋陽市胸科医院の盧振春副院長、瀋陽市胸科医院内視鏡センターの張慶主任、長春市伝染病院の鄭永利主任、呉春主任を団員とし、瀋陽市医学友好交流団を結成して会議に出席した。

10月18日、瀋陽から東京に向かい、成田国際空港から列車で東京に向かった。

10月19日、結核研究所にて午前10時、第25回結核予防及び胸部疾病日中友好交流会議が開会し、まず結核予防会工藤理事長の挨拶があり、その後日中友好交流団団長孫穎院長が挨拶し、続いて日中双方の記念品交換があり、簡潔ながら厳粛な開会式の後に双方の学術報告が始まった。会議の内容は以下の通り。

中国の講演：1、中国の薬剤耐性結核の現状。2、気管-気管支結核の気管支鏡治療に関するレビューと考察。日本の講演：1、デラマニドの肺結核に対する治療効果。2、肺結核の外科治療。昼食後、複十字病院の結核病棟を視察し、講演終了後、日中双方の専門家がLAMP法の結果報告と展望について意見交換会を行った。日中双方の指導者及び専門家が、いかに日中の共同医学研究を発展させるかについて自由に討議

し、非常に友好的で打ち解けた雰囲気であった。最後に、島尾名誉顧問が今回の会議の総括を行った。会議全体の手配は良く整っていて、友好的な雰囲気であり、内容も充実していた。

10月20日、都内の視察をした。1,300万人以上の人口を擁する国際大都市は、高層ビルが林立し、通りは整って清潔で、公共交通が発達し、何もかも秩序が整然としていた。午後は仙台へ移動し、市内の江陽グラウンドホテルで宮城県結核予防会主催の歓迎会があり、同会理事長挨拶の後、中国側交流団団長の孫穎院長が挨拶し、瀋陽市防痨協會及び胸科医院を代表して記念品を贈り、記念撮影を行った。

10月21日、魯迅、青葉城見学をし、続いて同会複十字健診センター読影室を視察し、友好的な雰囲気の下、充実した内容の交流と討論を行った。

5日間の友好交流活動はあっという間に過ぎ、10月22日結核予防会と通訳の人々が成田国際空港まで我々を送ってくれた。今回の第25回友好交流も円満に成功したことを確認し、2017年も瀋陽にて第26回友好交流活動を継続することを約束した。

今回の交流を通して、我々は日本が結核対策において成し遂げた業績を感じた。数十年前は日本も結核に脅かされた国家の一つであり、数代にわたる人々の努力を経て結核の流行は日本において効果的に抑制された。各種の新技術が臨床に応用され、有効なDOTS管理戦略が実施され、日本の結核流行の抑制に要となる作用をもたらした。日本の結核専門家の謹厳で実務的な仕事と友好的で心のこもったもてなしは、我々に深い印象を残した。

結核は全人類の呼吸道を脅かす伝染病である。この30年、中国は結核対策の方面でも世間が注目する成績を上げているが、情勢は依然として厳しく、我が国の政府は結核を国家重点対策伝染病の一つとしている。国際協力と交流を強化し、全世界で効果的に結核を抑制することが重要である。日本は先進的な技術開発基盤及び先進的な管理措置と経験を持っており、日中両国の専門家が手を携えて共に努力することにより、遠くない将来、結核を撲滅する日が来ると信じている。🐼

私の人工気胸時代



樋口 恵子

終戦時、私は、自宅で肺結核の療養中であった。その年の4月、空襲・警戒警報が引き続くなか、高等女学校に入学はしたものの、通学したのは僅か2日。3日目に高熱が出て、父の知人の紹介により、清瀬の結核研究所で受診、岡治道先生に肺門淋巴腺炎、学校は1年以上休学、と宣告された。

その後、岩崎龍郎先生から人工気胸を週一度受けることになった。1年半の休学でまずは全快、学校には1年下がって復学した。人工気胸のほうは2年以上続き、私は復学しても週に一度は半休を取って清瀬に通い続けたことになる。

当時は「厄介な病気になった」と身の不幸を嘆くばかりだったが、思春期の2年近く、それもあの敗戦をはさんで社会から孤絶した自宅という場所にいたことは、その後の人生に大きな影響を与えている。

2年間、私は同年輩の友人とはほとんどだれにも会

わなかった。幼いころから付き合いが広くて休日には友だちがいつも遊びに来ていたのに、女学校入学でバラバラになったとは言いながらピタリと一人も来なくなった。当時の結核がどんなに人から恐れられていたかを物語っている。同じ時期に遠くの疎開先にいた親友が同病になり三日にあげず文通するのが唯一の交流であった。この友人とは、のちに同じ高校に進学、大学もいっしょで、職業は違うがそれぞれ定年まで勤め上げた。近ごろ同年輩の訃報が重なるなか、84歳の今まで仲良く生き延びている。思春期の肺結核というのは、二人に限って言えば寿命に影響しなかったようだ。岡先生、岩崎先生のおかげ、ひいては結核予防会のおかげさまである。

2年以上にわたる清瀬通いは、学校仲間から孤絶した私に、ちょっと奇妙な、とても濃密な人間関係をもたらしてくれた。人工気胸を受けに若い結核患者が10

予防会だより

イタリアストップ結核パートナーシップ (Stop TB Italy) 事務局長ダニエラ氏来日

イタリアストップ結核パートナーシップ (STI) 事務局長ダニエラ・シリロ (Dniela Cirillo) 氏が11月上旬来日され、結核予防会本部、ストップ結核パートナーシップ日本事務局を訪問された。ダニエラ氏は、ミラノ市にあるサン・ラファエル科学研究所の細菌検査部長で結核の世界的細菌学者でもある。

同氏は、11/4 新宿区保健所を見学され、その後本会総裁にお会いし、STIの活動や最近のイタリアにおける結核啓発教材の紹介をされた。11/5には結核予防会およびストップ結核パートナーシップ日本の幹部と面談し、情報交換を行った。すでに低まん延下にあ



前列右側 ダニエラ局長

るイタリアでは移民の結核が多く、結核への意識が低いため、一般市民、医療従事者への啓発が重要であること、感染症医が結核患者を診療していることなど貴重な情報を伝えられた。

人以上通っていて、待合室でいつも顔を合わせた。私は最年少だったろう。地域柄近くの自由学園の学生が多く彼女らはみんな顔見知り。中に一人他の女専（今の女子大）へ通う4、5歳年上のTさんがいて、あっという間に親しくなった。治療がすむまで待ち合わせ、その後の長時間、清瀬の雑木林の間を歩き、草や枯れ葉の上に座り込んで長いこと話し合った。何を話したのかほとんど覚えていないが、読んだ本の話、家族の話、これから日本はどうか、女性の地位はほんとに向上するのだろうか。小生意気な中学生がぶつける質問に、Tさんは5歳ほど年長の人生の厚みを十分に発揮して応じてくれた。当時の女子専門学校生の見識は相当のものであった。私はちょっと先輩の同性と語る喜びに半分酔っ払った感じで、通院が楽しみだった。

話の中身は大かた忘れてしまったと言ったが、一つだけ鮮明な記憶がある。復学して、すっかり新しいクラスに溶け込んだころ、中1の終わりか中2の初めだった。クラスの一部で「子供はどうやって出来るのか」ということがひそひそと真剣な話題になった。私は、明治・大正文学全集などよく目を通し「絶対に何かある」とは思ったが確信はなかった。そしてある清瀬通いの帰途、林の中に座り込んでTさんに聞いたしたのである。

Tさんは「私だって経験ないのよ」と言って、最近

結婚した姉上の話など、落ちついてあとで思えばまずは正確な知識を授けてくれた。いやらしさはみじんもなかった。知ったからといって人生観も何ら変わらなかった。

事実を知り得た喜びは大きく、私は翌日の昼休み、「重大なことを教えてあげるから、奉安殿裏に集まって」とクラスメートに知らせた。Tさんのことばを口移しに伝えたが、かなりの人はすでに知っていたのだろう、表情を変えなかった。中に一人「お父さまとお母さまがそんなこと、信じられない」と泣き出し泣きやまず私は閉口した。彼女はのちに二児の母となり、PTAの役員として私を講演に招いてくれた。

終戦直後の女子中学生の性知識はこんなものであった。奉安殿というのは「ご真影」と呼ばれた天皇・皇后の写真を安置したコンクリートの頑丈な小建築物で学園内でも奥まった場所にあったから、ひっそりした集会には好適な場所であった。

卒業してからも、みんな「おシバの性教育」と言って、クラス会などで楽しい思い出話にしてくれた。おシバというのは旧姓柴田と言った私の呼び名である。その仲間たちの中にも近ごろは中学時代の話が全く通じない、認知症の人が増えてきている。平和と豊かさの賜として長寿に恵まれたおかげではあるけれど。🍵

東京都支部と連携して江戸川区民まつりに参加

第39回江戸川区民まつりが、平成28年10月9日（日）都立篠崎公園にて開催された。当日は、午前中あいにくの雨となり、低温も重なり例年と比べ人出の少ないお祭りとなった。

イベントは、本部と東京都支部が協力して行い、広報資材は東京都支部から提供され、クイズの景品としてボールペンが使われた。

本部からは、募金推進部2名が参加、結核やエイズの感染症の普及啓発を行った。他のブースでは、肌寒かったために温かい食べものを販売するブースに人が集まった。宮城県気仙沼からは、ホタテ、カキ、気仙



沼ホルモンなどが販売され、賑わいを見せていた。フレンド広場では、北海道渡島地区が初出店するなど注目のイベントとなった。（齋藤）

あなたの肺は何歳？

COPD認知率向上のために、今年度に結核予防会が行ったイベント

(結核予防会、COPD啓発プロジェクト、日本COPD対策推進会議、朝日新聞社、グラクソ・スミスクライン共催)

結核予防会 事業部副部長 佐藤 利光

COPDプラクティカルセミナー

昨年7月8日に東京・品川で結核予防会COPDプラクティカルセミナーが行われ、本支部職員25名がスパイロメトリーの操作を学んだ。このセミナーでは本会複十字病院呼吸ケアリハビリテーションセンターの千住部長に講師をお願いした。支部からは、保健師・看護師・臨床検査技師・事務職員と多職種にわたる参加を得た。千住部長は長崎県内のフィールドワークで実績のあるこの分野の第一人者で、たばこ病であるCOPD(慢性閉塞性肺疾患)の病理とリハビリの重要性についてわかりやすく解説した。大半の時間は、スパイロの使い方と結果数値の読み方に費やされ、実地ですぐに役に立つスキルを身に着けることができた。

COPD啓発イベント・肺年齢測定体験会

この後、8月から11月にかけて全国17カ所(表)でCOPD啓発イベント「あなたの肺は何歳？肺の健康について考えよう」を開催し、セミナー参加者の一部もスパイロの実施者として参加した。

健康日本21(第2次)では、平成34年度にCOPDを全国民80%に認知させることを目標としているが、平成25年の30.5%を最高に、以後伸び悩んでいるのが実情である(GOLD日本委員会調査)。この目標を達成するために、本会理事長工藤翔二が理事を務めるCOPD啓発プロジェクトでは平成29年度に認知率50%を目指して、さまざまな啓発運動を展開している。結核予防会では今回、この運動を支援するために、支部の協力を得て各地で肺年齢測定体験会を行った。

体験会の趣旨は、一般の人に実際にスパイロを体験してもらうことで肺年齢への興味を喚起し、ひいてはCOPDの認知率向上につなげたいというもので、昨年度末に共催団体から本会へ協力の要請があった。全国展開となると支部の助けは必須なのだが、開催時期が健診繁忙期にあたり、事業部として支部への依頼には心苦しいものがあった。しかしそれも全くの杞憂でみな趣旨理解のもと快く協力して頂けた。結核予防会の人的資源の豊富さを改めて実感した。

COPDは、先般、財務省試案で、たばこパッケージに注意喚起の文言が記載される方向が示され、近い将

来、喫煙者本人に対する健康影響のメッセージとして、肺がんや脳卒中とならんで人目に付くようになる。結核予防会としては、肺の生活習慣病としてその予防と治療に注力し、各方面にCOPDの重要性を説いてきた側として、一つの成果を得た形となった。そのような国への働きかけと一般向け啓発活動は、運動の両輪であり、今年度はその両方で歩みを進めることができた。

全国イベントは、全体で2,639名(スパイロ実施)の参加を得た。大阪では梅田駅地下街の非常に人通りの多いところで行い、4時間に272名がスパイロを体験した。京都では台風の直撃があり、会場管理者の京都駅当局から途中で中止命令が出るというアクシデントもあった。実施場所は、自治体所有のビルや大型商業施設のイベントスペース、駅頭などさまざまであった。集客条件に差はあったが、どこでも各支部の精鋭スタッフが手際よくスパイロを実施した。また、支部に健診業務のない岐阜県では、民間の健診団体である岐阜健康管理センターの協力を仰いだ。

会場周辺での呼び込みではチラシを手渡すのだが、肺年齢という言葉に興味を持つ人が多かった。健康そのものより、“肺の年齢”が引くかかるようである。肌年齢、脳年齢、骨年齢、血管年齢など様々な年齢があるが、これらと並んで肺年齢の認知度が上がることが、即ち、COPDの認知度向上であると考えている。結核予防会としては今後のCOPD認知度を高めるために、活動を続ける。

ご協力を頂いた各支部には改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。🐼

表 COPD啓発イベント実施会場

	開催日	地区	会場
1	8月21日(日)	茨城(筑波)	イーアスつくば
2	8月24日(水)	山梨(甲府)	やまなしプラザ
3	8月27日(土)	岩手(盛岡)	イオンモール盛岡
4	9月9日(金)	北海道(札幌)	チカホ北大通交差点広場
5	9月11日(日)	愛媛(松山)	いよてつ高島屋
6	9月13日(火)	長野(長野)	MIDORI長野リンゴの広場
7	9月14日(水)	神奈川(横浜)	横浜新都市ビル(そごう)
8	9月20日(火)	京都(京都)	京都駅前広場
9	9月25日(日)	岐阜(岐阜)	マーサ21
10	9月26日(月)	埼玉(大宮)	大宮駅西口改札外スペース
11	9月29日(木)	大阪(梅田)	ディースクエア
12	10月6日(木)	福岡(博多)	博多駅前 賑わい交流空間
13	10月17日(月)	東京(新宿)	新宿駅西口広場
14	10月22日(土)	東京(有楽町)	東京交通会館
15	10月23日(日)	三重(鈴鹿)	イオンモール鈴鹿
16	11月3日(木)	山口(下関)	下関大丸
17	11月7日(月)	東京(水道橋)	結核予防会

※各回とも13時～17時。ミニセミナー15分と肺年齢測定45分を繰り返した。

平成28年度ブロック会議の開催

平成28年度も各都道府県支部が6ブロックに分かれ、次のとおり会議が開催された。健診繁忙期の中大勢の参加を得て、各地で懸案となる課題について活発な議論が行われた。

【北海道・東北地区】

日 程 10月27日（木）
場 所 宮城県（江陽グランドホテル）
出席者 44名（北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島、本部）

【関東・甲信越地区】

日 程 11月11日（金）
場 所 新潟県（ANAクラウンプラザホテル新潟）
出席者 35名（茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨、長野、新潟、本部）

【東海・北陸地区】

日 程 11月24日（木）
場 所 愛知県（ホテル ルプラ山王）
出席者 22名（富山、石川、福井、岐阜、静岡、愛知、三重、本部）

【近畿地区】

日 程 10月28日（金）
場 所 和歌山県（ホテルグランヴィア和歌山）
出席者 23名（滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、本部）

【中国・四国地区】

日 程 10月28日（金）
場 所 愛媛県（ホテルJALシティ松山）
出席者 48名（鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知、本部）

【九州・沖縄地区】

日 程 10月21日（金）
場 所 佐賀県（ホテルニューオータニ佐賀）
出席者 37名（福岡、佐賀、熊本、大分、宮崎、鹿児島、本部）

第2回複十字病院地域交流会 開催

— 顔の見える連携 —

結核予防会複十字病院

事務部庶務課長 菊地 健司

2016年11月29日清瀬市生涯学習センターアミューホールにて、「顔の見える連携」をテーマに第2回複十字病院地域交流会が開催された。北多摩北部医療圏及び近隣する埼玉西部地域（所沢市・新座市等）から多数の参加があり、地域包括部門や退院調整部門など多くの職種に参加していただいた。清瀬駅前で開催したこともあり、外部からの参加者だけで140名をかぞえ、第1回の交流会に引き続き大盛況であった。

講演内容は清瀬消防署の石黒係長より救急隊の現状を分かりやすくご説明いただき、北多摩クリニック所長の保坂先生からは在宅医としての取り組みや課題についてご説明いただいた。

意見交換会では「複十字病院の交流会ではワイン」というのが定着しつつあり、今回も当院登録医会代

プログラム

- 19:00 当院診療トピックス
消化器センター・乳腺センター紹介
- 19:25 基調講演①『救急隊と医療機関との連携』
東京消防庁清瀬消防署警防課救急係長兼二部大隊長 石黒裕治先生
基調講演②『患者中心の医療から、ひと中心の協同への転換～死難民の解消のために～』
西都保健生活協同組合北多摩クリニック所長 保坂幸男先生
- 20:40 意見交換会

表幹事の中川先生が選んだ3種類のワインを味わいながら「顔の見える連携」を実践することができ、意見交換会も盛会のうちに終了した。🍷

平成28年度『診療放射線技師研修会』 仙台開催のお知らせ

日本対がん協会と結核予防会は、主に検診業務に従事する診療放射線技師を対象とした研修会を共催しております。その「診療放射線技師研修会」が今回15回目の節目となることから、特別に東日本大震災の被災地である仙台で開催致します。

ご存知の通り、東日本大震災は本年3月11日で被災後6年になりますが、阪神淡路大震災の時よりも、復興は遅れているようです。また、昨年4月14日には熊本地震が、更に10月21日には鳥取県中部地震が起きた事は記憶に新しいと思います。

災害等に対する支援体制の構築は全国組織として必須の課題とされておりますが、当協議会も全国組織として、本研修会を通じて災害支援に賛同し、全面的に協力して行きたいと思っております。

特別企画としては、被災地に赴きリアルな現状を肌で感じつつ、実際に大震災を経験された方々から防災の必要性を学び、それを所属機関にフィードバックして行きたいと考え、研修会最終日（3月11日）には被災地視察も計画しております。

一人でも多くの方々が被災地を訪れることが、結果として経済の活性化に繋がり、そのことが復興のスピードを速めるための一助になると考えております。ぜひ皆様のご参加をお待ちしております。

日 程：平成29年3月9日（木）～3月11日（土）
※単位修得には、3日間全ての履修が条件となります

会 場：仙台市情報・産業プラザ
（JR仙台駅下車徒歩2分）
〒980-6105 宮城県仙台市青葉区中央1-3-1
アエル6Fセミナールーム

参 加 費：お一人 32,400円（税込）
※研修中の昼食はつきません。また宿泊が必要な場合はご自身でご予約願います。

申込締切：平成29年1月27日（金）

申込・問合せ先：研修担当 公益財団法人結核予防会
募金推進部 蛸原

TEL 03-3292-9287/FAX 03-3292-9208

E-mail shikin@jatahq.org

平成28年度診療放射線技師研修会プログラム（案）

3月9日（木）	3月10日（金）	3月11日（土）
9時30分～10時 受付 10時～10時15分 オリエンテーション・開講式 10時15分～13時 「グループ討議」 胃部・胸部・乳房	9時10分～11時30分 フィルム評価 【リーダー】 新井 敏子（日本乳がん検診精度管理中央機構教育研修委員） 伊藤 登（栃木県保健衛生事業団技術部放射線課主任） 赤松 暁（結核予防会診療放射線技師協議会顧問） 藤澤 靖（京都予防医学センター業務部放射線科技師長）	9時～12時 被災地視察 バスでの移動 （視察終了後、解散）
13時～14時15分（昼 食）	11時30分～13時（昼 食）	
14時15分～15時15分 「胃X線検診（健診）における安全管理」 宮城県対がん協会 放射線課長 金子 貴安	13時～14時 「医療被ばくのリスクコミュニケーション」 結核予防会結核研究所 対策支援部放射線学科技術専門役 星野 豊	※3月9日（木）18時～19時 意見交換会 ※3月10日（金）12時30分～13時 結核予防会診療放射線技師協議会総会（支部のみ）
15時25分～16時25分 「乳がん検診の精度管理」 東北大学病院 診療技術部放射線部門放射線部副技師長 斎 政博	14時10分～15時10分 「結核について」 宮城県結核予防会 副理事長（兼）複十字健診センター所長 松田 堯	※当研修会は一般社団法人日本消化器がん検診学会・胃がん検診専門技師認定制度の更新時2単位、NPO法人肺がんCT検診認定機構の認定技師更新単位として5単位が認められております。
16時35分～17時35分 「CT画像の読影」 東京都結核予防会 顧問 畠山 雅行	15時20分～16時20分 「胃X線写真でここが診たい」 宮城県対がん協会がん検診センター 副所長（兼）消化器担当科長 加藤 勝章	※講師の都合により日程及び講義内容が変更することもあります。
	16時30分～17時30分 「東日本大震災の経験」 石巻赤十字病院 放射線技術課長 及川 順一 17時30分～18時 閉講式	



厚生労働省が受動喫煙防止対策強化に乗り出す！

国は動き出した

平成28年10月12日（水）に、厚生労働省は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据えて、受動喫煙防止対策の一環として、喫煙者本人や施設管理者への罰則付きで医療機関や学校は敷地内全面禁煙とするたたき台を発表した。

基本的な考え方は、施設の用途・利用者・利用者がその施設を選択できるかどうかを勘案して、①建物内禁煙、②敷地内禁煙、③原則建物内禁煙で喫煙室設置可の3分類を示した。

これらの対策の実効性を担保するため、施設利用者は、喫煙禁止場所で喫煙をしない義務を、施設管理者は、喫煙禁止場所の範囲や喫煙室の位置等を掲示する義務、喫煙禁止場所において喫煙器具等を設置しない義務、喫煙室の設備・構造を受動喫煙防止対策のための技術的基準に適合させる義務が課される。さらに、施設管理者には、喫煙禁止場所において喫煙者を発見した場合に喫煙を止めることを喫煙者に求める努力義務や喫煙室への未成年者の立入りを防止する努力義務が課されることになっている。

さらに、義務違反者には、勧告・命令等を行い、それでもなお義務に違反する場合には罰則を適用することとなっている（喫煙室に係る記述的基準や罰則については詳細検討中）。

受動喫煙防止対策の内容（たたき台）

官公庁	①建物内禁煙
社会福祉施設	①建物内禁煙
運動施設（スタジアム等）	①建物内禁煙
医療機関	②敷地内禁煙
小学校、中学校、高校	②敷地内禁煙
大学	①建物内禁煙
サービス業 （飲食店、ホテル・旅館（ロビーほか共用部分）等のサービス業施設）	③原則建物内禁煙（喫煙室設置可）
事務所（職場）	③原則建物内禁煙（喫煙室設置可）
ビル等の共有部分	③原則建物内禁煙（喫煙室設置可）
駅、空港ビル、船着場、バスターミナル	③原則建物内禁煙（喫煙室設置可）
バス、タクシー	①全面禁煙
鉄道、船舶	③原則禁煙（喫煙室設置可）

自民党・受動喫煙防止議員連盟も働きかけ

平成28年10月25日（火）に自民党の受動喫煙防止議員連盟会長の山東昭子元参院副議長が、首相官邸で菅義偉官房長官と会い、2020年の東京五輪・パラリンピックに向けた受動喫煙防止対策として、たばこ税の増税にあわせ、たばこ1箱の価格を1,000円以上に引き上げるよう申し入れた。菅官房長官は、「五輪もあり、いいタイミングだ」と応じ、受動喫煙防止のための法整備を急ぐ考えを示した。

受動喫煙防止対策強化検討チームワーキンググループの公開ヒアリング開催

平成28年10月31日（月）には、10月12日に発表された「受動喫煙防止対策の強化について（たたき台）」について、厚生労働省は都内で業界団体の意見聴取を行った。検討チームのワーキンググループには、厚生労働省以外に、スポーツ庁、農林水産省、経済産業省、国土交通省、財務省、内閣官房、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、東京都福祉保健局、東京都オリンピック・パラリンピック準備局が同席した。

第1回目には、船舶団体、私立大学関係、麻雀業界、ホスピス団体、病院団体、ホテル業界、飲食業界、消費者団体の10団体が参加した。

船や飲食店は、簡単に喫煙室を設けることができないなど反対意見があり、厚労省案の修正を求めた。また、ホスピスなど人生最後を看取る現場では、「最後の1本」という患者からの申し入れと、看護職・病棟スタッフの受動喫煙防止との間で、病院管理者ではなく、現場の師長などが苦慮しているという課題も示された。唯一消費者団体だけが全面的に賛同するとした。

第2回が11月16日（水）に開催され、20団体から意見聴取した。これらを元に、年内に対策の内容を決定する方針という。早ければ来年の通常国会へ法案を提出し、2019年ラグビーワールドカップ開催までの施行を目指す。（辻）

共感を寄付に繋げる —複十字シール運動担当者会議報告—

結核予防会募金推進部

推進課長 久保田 登子



伝える実践力を養う実習

平成28年11月11日、複十字シール運動担当者会議を本部にて開催しました。運動の推進を目的として毎年開催しているもので、21支部より22人の実務担当者が集いました。

近年国内では、寄付市場の拡大に向けた動きが盛り上がりを見せており、戦略的な寄付集めの手法等も確立してきています。専門的なノウハウを学びたいという意見もいただいております。今回はその分野を牽引している株式会社ファンドレックスから、講師としてイノウエヨシオ先生（ファンドレイジング・プロデューサー）をお招きし、「地域における志金循環の現状～感動と共感がコッーあなたは初対面の人に共感を集められますか？」と題したセッションを行っていただきました。講義では、「私たちは社会課題を解決するために支援（寄付）を必要としている」という、寄付をお願いすることの基本的な意味合いや、実際に支援（寄付）していただくためには、「課題への『共感』を得て、解決策を提案し、『納得』してもらう」ことが必要であるという、寄付という行為に繋げるために必要なプロセス等をお話いただきました。続いて、実習により共感・納得してもらえ

るよう伝える実践力を養いました。参加者からは「寄付してもらうためには、まずは共感してもらうことが大切だと分かった」、「伝え方について各支部で具体的に検討する必要があるだろう」等の感想があり、新たな視点で募金活動を見つめ直し、取り組みに生かす学びを得ることができました。

班別討議では、募金活動、キャンペーン等各班でテーマを自由に設定して討議・発表が行われました。「同じような課題を抱えているように思えた」、「もっと討議を深める時間が欲しかった」等の感想があり、各担当者の経験と知恵を結集し、共に考えていくことが運動の推進への大きな力となることが改めて感じられる活発な討議となりました。

複十字シール運動は、各都道府県支部に運営にご協力いただくことで全国的な広がりが実現しています。昨年7月の本部の組織改正により新設された募金推進部にて複十字シール運動を担当することになりました。引き続き、担当者の皆さまと連携して取り組んでいきたい、よろしくお願いいたします。本会議も一層充実させて参ります。ご参加いただいた皆さまお疲れ様でした。🐼

明治村における「結核との闘いの歴史展」のご案内

愛知県犬山市にある博物館明治村内の北里研究所本館・医学館におきまして、1983年より「結核との闘いの歴史展」という常設展示が行われています。結核の歴史のパネルの他、歴代の複十字シールもご覧頂けます。博物館明治村にお出かけの際には、ぜひお立ち寄りください。

（募金推進部推進課 尾高）



北里研究所本館・医学館外観

「複十字」掲載主要論文・記事一覧No.366 (1月号) ~No.371 (11月号) / 2016年

◆国内結核事情及び対策の動き

結核予防週間に寄せて(2016) 地域ごとの問題分析と解決への取り組みをー低まん延(10万対10)を促進し、制圧(根絶)を目指すために 石川 信克 No.370 9月 P 2
平成28年度結核予防週間実施要領 No.370 9月 P 4
「結核の統計2016を読む」ー統計を行動に生かす!ー 河津 里沙 No.370 9月 P 5
平成28年度結核予防週間実施予定行事 No.370 9月 P 24
2016結核予防週間レポート No.371 11月 P 2
結核予防週間活動・本部活動報告 No.371 11月 P 5

◆結核対策活動紹介

松戸市薬剤師会における薬局DOTSの現状について 飯塚 泰幸 No.366 1月 P16
行政と連携した奈良感染管理ネットワークの活動
~結核対策研修会の開催を通じて感じたこと、今後の活動の展望について~ 北島 政幸 No.367 3月 P14

地域における結核患者の地域包括ケア耐性の構築
~地域連携型服薬サポートの導入を通して~ 藺田 成央 No.368 5月 P14
個別患者支援計画に基づく高齢結核患者の支援

富士保健所の保健師が対面式DOTSに徹する理由と、その有効性の証明ー日本リウマチ学会及び日本結核病学会での発表を終えてー 藤田登志美 No.370 9月 P14
岡山晴れ晴れDOTS手帳導入による薬剤師の関わり 羽生 正一郎 No.371 11月 P21

◆健診関係

第25回健康支援セミナー開催 羽生 正一郎 No.368 5月 P21
結核予防会における総合胸部検診のあり方検討委員会第7回開催 羽生 正一郎 No.370 9月 P28

「総合胸部検診のあり方」検討委員会報告書の刊行に際して 竹下 隆夫 No.371 11月 P29

◆結核予防会関連行事・事業

第67回結核予防会全国大会開催要領(案) No.366 1月 表2
セミナー・フォーラム・推進会議等 No.366 1月 P 4
研鑽集会「地域で高齢結核患者を支えるーこれからの地域連携」 加藤 誠也 No.366 1月 P 5
第67回結核予防会全国大会支部長会議 No.366 1月 P 6
秋友宮妃記念結核予防功労賞第19回受賞者 No.366 1月 P 7

第74回日本公衆衛生学会総会報告
●第74回日本公衆衛生学会総会に参加して 西畑 伸二 No.366 1月 P14
●結核集団感染に関する自由集会に参加して 太田 正樹 No.366 1月 P15
第24回結核予防会及び胸部病日中友好交流会議
●瀧陽市胸科院とのTB-LAMPを用いた共同研究 岡田 耕輔 No.366 1月 P20
●第24回結核予防会及び胸部病日中友好交流会議への参加記録 鈴木 修治 No.366 1月 P21
平成27年度「診療放射線技師研修会」開催のご案内 No.366 1月 P29
第18回秋友宮妃記念結核予防功労賞世貴賞の授賞式 山本 正人 No.366 1月 表3
●第67回結核予防会全国大会を願ひ 小林 典子 No.367 3月 P 2
●研鑽集会:「地域で高齢結核患者を支えるーこれからの地域連携」 No.367 3月 P 4

●第67回結核予防会全国大会支部長会議 No.367 3月 P 5
●全国大会式典:厚生労働大臣祝辞・神奈川県知事挨拶 No.367 3月 P 6
●大会決議・宣言文採択 No.367 3月 P 7

シリーズ結核予防会国際研修50年を振り返って(1)
国際研修の開始、初期の展開 宮尾 忠男 No.367 3月 P 8
平成27年度胸部画像精度管理研究会に参加して 島尾 和志 No.367 3月 P17

第20回結核予防関係婦人団体中央講習会実施報告
婦人会活動の学会(まなびや)「中央講習会」 菅沼 貴子 No.367 3月 P23
第21回国際結核セミナー・平成27年度全国結核対策推進会議報告
●結核低まん延時代の患者見守り策 市村 康典 No.368 5月 P 2
●世界結核デー記念フォーラム「ストップ結核ジャパンアクション」 佐藤 利光 No.368 5月 P 3
●平成27年度全国結核対策推進会議に参加して 柴田ふじみ No.368 5月 P 1
一般社団法人日本呼吸器学会理事就任のご挨拶・第56回日本呼吸器学会学術講演会を終えて 橋本 修 No.368 5月 P 5

シリーズ結核予防会国際研修50年を振り返って(2)
●JICA結核国際研修のコースの変遷 山田 紀男 No.368 5月 P10
●第1回結核国際研修生 Dr.Thavisakdi Bamrungtrakul No.368 5月 P11
平成27年度診療放射線技師研修会を終えて 福井 健 No.368 5月 P20
結核研究所が開催する国内研修のご案内 No.368 5月 P26
2016年度ACジャパン支援キャンペーンが始まります! No.369 7月 P 3

第91回日本結核病学会総会
●日本の将来の抗酸菌症を見据えて何をすべきか 医療スタッフの抗酸菌症卒後教育 瀧井 猛将 No.369 7月 P 4
●研究発表・監(結核予防会本部職員) No.369 7月 P 6
第9回呼吸の日記念フォーラム(2016)「肺の健康 みんな知ろうCOPD(慢性閉塞性肺疾患)」 山本 正人 No.369 7月 P28

平成28年度結核予防技術者地区別講習会実施報告 安藤慎治・佐藤明絵・丸山聡・山本真奈都・齊藤典代・岡本哲也・篠原由紀子 No.371 11月 P12
国際研修「平成28年度UHC時代における結核制圧コース」に参加して 陳 禹 No.371 11月 P28

◆世界の結核事業と結核対策の動き
シリーズ世界の結核事情(1)
G7伊勢志摩サミット、TICADに向けたJICAの結核対策支援 柳沢 香枝 No.366 1月 P11
第46回国際結核・肺疾患予防連合(The Union)世界会議
●「テーマ:新しい課題、2015年以降の肺の健康」 下内 明 No.366 1月 P12
●次世代の短期併用レジメン開発に向けた世界の動向 土井 教生 No.366 1月 P13
国際結核肺疾患予防連合アジア太平洋地域学術大会(APRC2017)準備委員会だより No.4 No.366 1月 P31
海外よりHappy New Year2016! No.366 1月 P32

結核予防会が行う国際協力
●日本医学協力計画50周年記念式典から 森 亨 No.367 3月 P10
●新しい取り組みに向かって、さるる複十字シール募金をーカンボジアスタディツアーに参加して思うことー 藤井 恵子 No.367 3月 P11
シリーズ世界の結核事情(2)
アフリカ・アジアにおける結核対策の現状と課題 磯野 光夫 No.367 3月 P12
グローバルファンド第5次増資準備会開催 岡田 耕輔 No.367 3月 P13
アフリカ・アジアで新たな結核対策プロジェクトを開始しました 竹村有香理 No.367 3月 P17
3月24日は世界結核デーです。 No.367 3月 P23
国際結核肺疾患予防連合アジア太平洋地域学術大会(APRC2017)準備委員会だより No.9 No.367 3月 P29

シリーズ世界の結核事情(3)
バブアニューギニアにおける結核対策の現状と課題 宮野 真輔 No.368 5月 P 6
2016年世界結核デー報告 No.368 5月 P 7
国際結核肺疾患予防連合アジア太平洋地域学術大会(APRC2017)準備委員会だより No.6 No.368 5月 P 7
WHOにしたい併用事務局結核対策官会議 加藤 誠也 No.368 5月 P 8
第41回結核サーベイランス研究会(TSRU)ーロンドンにて開催 大角 晃弘 No.368 5月 P 9
結核予防会が行う国際協力 日本式健診・健診センター設立プロジェクト第1回カンボジア医療セミナー 土井 教生 No.368 5月 P12
●開催報告 菅本 鉄広 No.368 5月 P12
●講師として参加して 貴和 敏博 No.368 5月 P12
第3回日経アジア感染症会議報告 貴和 敏博 No.369 7月 P 2
シリーズ世界の結核事情(4)フィリピンの結核対策について 佐藤 智代 No.369 7月 P 7

結核予防会が行う国際協力
カンボジア国プレン州ピアレン医療園結核診断体制強化プロジェクト
ー2年間の外務省官の根拠無償協力による活動を振り返ってー 小林 繁郎 No.369 7月 P 8
シリーズ結核予防会国際研修50年を振り返って(3)
●結核国際研修の裏話 今村 昌耕 No.369 7月 P10
●世界の結核対策をリードする国際研修の継続を Dr.Alexandre Manguelle No.369 7月 P11
国際結核肺疾患予防連合アジア太平洋地域学術大会(APRC2017)準備委員会だより No.7 No.369 7月 P12

世界の結核事情(5) 結核対策へのジェンダー視点 瀬古 素子 No.370 7月 P18
シリーズ結核予防会国際研修50年を振り返って(4)
●JICA結核国際研修会コースの最近のエピソードと今後の展望 平尾 晋 No.370 9月 P20
●国際研修で得た知識を生かして世界で活躍 Prof.Dr.Tjandra Yoga Aditama No.370 9月 P21
第16回結核戦略・技術諮問グループ(STAG-TB: Strategic Technical Advisory Group for Tuberculosis)会議 岡田 耕輔 No.370 9月 P22
国際結核肺疾患予防連合アジア太平洋地域学術大会(APRC2017)準備委員会だより No.8 No.370 9月 表3
世界の結核事情(6) ミャンマーにおける結核対策支援 野崎威功真 No.371 11月 P15

結核を生きる 結核との10年におよぶ長い闘いーミルドレッドさんの場合ー ミルドレッド No.371 11月 P16
シリーズ結核予防会国際研修50年を振り返って(5)

結核ラボ国際研修(結核菌検査コース) 藤木 明子 No.371 11月 P22
国際結核肺疾患予防連合アジア太平洋地域学術大会(APRC2017)準備委員会だより No.9 No.371 11月 表3

◆ストップ結核パートナーシップ日本関連

ストップ結核パートナーシップ日本だよりNo.34 Global Plan To End TB 2016-2020: パラダイムシフト 宮本 彩子 No.366 1月 P30
ストップ結核パートナーシップ日本だよりNo.35 アドボカシー 宮本 彩子 No.367 3月 P30
アジア・ストップ結核パートナーシップ・フォーラム 森 亨 No.368 5月 P22
ストップ結核パートナーシップ日本だよりNo.36 予算要望活動 宮本 彩子 No.370 9月 P31

◆結核予防会本部・事業所・支部から

結核予防会支部だより
●オリン大会で複十字シール運動をアピール 葛西 浄宣 No.366 1月 P24
●オリン大会で複十字シール運動をアピール 藤原 照正 No.366 1月 P25
東日本大震災の被災者支援活動

ヒューマンケアの絆プロジェクト2015~参加報告 佐藤 利光 No.366 1月 P26
江戸川区民まつりに参加して 市川 隆司 No.366 1月 P27
東京ロータリークラブ例会にて普及広報活動を実施しました! 藤原 照正 No.366 1月 P27

結核予防会支部だより
●胸部総合健診について 白井 義修 No.367 3月 P20
●「宝くじ号」静岡県支部に導入 静岡県結核予防会 No.367 3月 P21
第11回複十字病院院内発表会 複十字病院第11回院内発表会事務局 No.367 3月 P26

質の高い業務を目指して
第5回本部・総合健診推進センター合同業績発表会 渡邊 光昭 No.367 3月 P27
日本国際保健医療学会学術大会でベストポスター賞受賞! No.367 3月 P21
結核・非定型抗酸菌症治療研究会で「島尾忠男記念研究奨励賞」が創設されました。 No.367 3月 P21

平成27年度結核予防会全国支部事務局長研修会並びに全国支部事務連絡会議 No.367 3月 P21
ネパールへ車の寄贈 No.367 3月 P28
結核予防会よりカンボジア結核プロジェクトの村落ヘルスワーカーへの研修寄贈 小林 繁郎 No.368 5月 P25
清瀬市立中央図書館にて結核関連資料が展示されました No.368 5月 P28

熊本地震 大規模災害対策委員会協大事務局会議報告 前川 眞悟 No.369 7月 P26
第7回結核予防会学術発表会開催報告 No.370 9月 P27
複十字病院地域交流会開催される No.370 9月 P32
結核予防会啓発ポスター・パンフレット「結核の常識2016」を差し上げます 山本 正人 No.370 9月 表4
カンボジア健診・検査センター設立プロジェクト進捗報告 No.371 11月 P31

バナルディスカッション「レントゲン」がアフリカの健康を守る! 柳亮一郎・菅本鉄広 No.371 11月 P31
グローバルフェスタJAPAN2016「for the First Step~新しい目標に向か」 No.371 11月 表3
清瀬市とブックカバーを作りました! No.371 11月 表3

◆複十字シール運動
シール募金の活性化を目指して 齋藤 隆則 No.366 1月 P28
滋賀県健康づくり財団(滋賀県支部)による募金活動が実施されました No.366 1月 P32
複十字シールコンテスト No.366 1月 表3
今年も第一生命情報システム株式会社にシール運動を実施! No.367 3月 P28
平成28年度複十字シール 図案の原画 安野光雅氏の楽しい世界 第15回 〇もうひとりの自分〇 No.367 3月 表3

平成28年度複十字シール 図案の原画 安野光雅氏の楽しい世界 第15回 〇もうひとりの自分〇 No.367 3月 表3
平成27年度高額寄附をいただいた方々からのメッセージ No.368 5月 表2
平成27年度複十字シール募金結果報告 No.369 7月 P29
平成28年度複十字シール No.369 7月 P31
平成28年度結核予防会知事表敬訪問報告 No.369 7月 表3
シール募金の広報資料できました No.370 9月 表4
平成28年度知事表敬訪問報告 続報 No.371 11月 P 8

◆エイズ・感染症
HIV感染者・エイズ患者の現状 知っていても、分かっていても AIDS IS NOT OVER エイズ予防財団 No.370 9月 P30

◆教育の頁
高齢者の結核に 佐々木結花 No.366 1月 P18
結核医療の基準改正について 吉山 崇 No.367 3月 P16
結核菌はマイクロファージによる殺菌分解機構からどのようにに回避しているのか? 瀬戸真太郎 No.368 5月 P16
医療施設での薬物対策ー感染症病棟の場合には 寛 淳夫 No.369 7月 P14

Dr.黒崎の胸部画像診断教室No.1 胸部単純X線写真:何が見えるの? 黒崎 敦子 No.369 7月 P16
日本版DOTSーこれまで、そして、これから 小林 典子 No.370 9月 P 8
英国の院内感染対策を垣間見る 木村幹男・高田修嗣 No.371 11月 P18

◆生活習慣病・COPD
COPD啓発イベント「肺年齢って何?~自分の肺年齢を知ろう」 No.366 1月 P27
シリーズ生活習慣病(6) 心血管疾患 及川 真一 No.367 3月 P18
結核予防会COPDプラクティカルセミナー開催します No.368 5月 P25
COPDプラクティカルセミナー・COPD啓発イベント開始 No.370 9月 P32

◆たばこ
東京都医師会のたばこ対策(特に受動喫煙防止対策)について 尾崎 治夫 No.367 3月 P24
受動喫煙のない日本をめざす委員会 財務省、厚生労働省に「たばこパッケージの健康警告表示についての要望書」提出! No.367 3月 P25
5月31日は世界禁煙デーです No.368 5月 P27
結核予防会の禁煙ポスターが出来ました! No.368 5月 P27
2020年に向けて受動喫煙防止法制化を目指す 〇もうひとりの自分〇 No.369 7月 P25
ー2016年世界禁煙デー記念イベント開催ー No.369 7月 P25
2020年を見据え、受動喫煙のない社会を目指して 〇もうひとりの自分〇 No.369 7月 P25
世界禁煙デー2016メディアセミナー&街頭キャンペーン 〇もうひとりの自分〇 No.369 7月 P25
ー日本の今後の受動喫煙防止を考えるー No.369 7月 P25
スモークフリーー日本のビジョン実現のために 〇もうひとりの自分〇 No.370 9月 P29
たばこ対策に関する国際シンポジウム開催 〇もうひとりの自分〇 No.371 11月 P30
受動喫煙のない日本をめざす委員会 東京都知事小池百合子氏宛に要望書 〇もうひとりの自分〇 No.371 11月 P30

◆いっしょに悩んで
藤澤七郎先生を偲んで 江里口正純 No.368 5月 P18
野上圭一先生を偲んで 武内 健一 No.369 7月 P18
仲村英一先生を偲んで 田中慶司・中谷比呂樹 No.371 11月 P26

◆素顔メッセージ
第67回結核予防会全国大会を迎えて 黒岩 祐三 No.366 1月 P 1
新春あけさつ2016 工藤翔二・家田健司・松尾美智代 No.367 1月 P 3-4
支部長就任のご挨拶 前裕 健作 No.367 3月 P 1
「決意を新たに、結核予防活動に挑戦」 木下 幸子 No.368 5月 P 1
公益社団法人結核予防会婦人団体連絡協議会会長に就任し 植木 恵二 No.369 7月 P 1
結核予防週間に当たって 浅沼 一成 No.370 9月 P 1
支部長就任のご挨拶 須藤 英仁 No.371 11月 P 1

◆ずいひつ
心をひろえて 岡西 雅子 No.366 1月 P22
2025年問題への切り札ー保健・医療・福祉の資格職種の正確な把握と適切な相互活用ー 〇もうひとりの自分〇 No.368 5月 P13
小なりリクエスト 松尾 邦弘 No.370 7月 P17

◆TBアガヒ
~結核に縁(ゆかり)の地を訪ね~ 第8回「東京都江東区砂町」 島尾 忠男 No.366 1月 P23
~一企画画「石田波郷と清瀬」を訪ねて~ 島尾 忠男 No.369 7月 P20
~結核に縁(ゆかり)の地を訪ね~ 第9回「元村村晴嵐荘病院、現茨城県東病院」 島尾 忠男 No.369 7月 P20

◆その他
厚生労働省健康局長就任に当たって 福島 靖正 No.366 1月 P 2
厚生労働省健康局長就任に当たって 浅沼 一成 No.366 1月 P 2
生と死を往還した結核闘病生活と悲願の社会復帰への軌跡 竹下 隆夫 No.367 3月 P22
「書評」大場昇著「わが心のザトウリウム保生園」 石川 信克 No.368 5月 P24
島尾忠男先生が「第2回山上の光賞」を受賞される 〇もうひとりの自分〇 No.368 5月 P24
婦人会が善徳協働まちづくり表彰を受賞される 〇もうひとりの自分〇 No.369 7月 P27
「映像で振り返る結核対策ー公衆衛生の歴史」が第57回科学技術映像祭の特別奨励賞を受賞 竹下 隆夫 No.369 7月 P27
島尾忠男先生が「第2回山上の光賞」を受賞 〇もうひとりの自分〇 No.371 11月 P30
第68回保健文化賞 結核予防会募金推進部小林部長が受賞! 〇もうひとりの自分〇 No.371 11月 P30

結核研究所 セミナー・会議予告

会場：ヤクルトホール 東京都港区東新橋1-1-19 JR新橋駅より徒歩5分

主催：公益財団法人結核予防会、結核研究所

◆第22回 世界結核デー記念 国際結核セミナー

平成29年3月2日(木) 14:30~19:00

テーマ「低まん延化に向けた今後の結核対策」

◆平成28年度 全国結核対策推進会議

平成29年3月3日(金) 9:15~15:15

テーマ「結核に関する特定感染症予防指針改正を踏まえた今後の結核対策」



シールだより

多額のご寄附をくださった方々

〈指定寄附等〉(敬称略)

小野信子(結核研究所)

〈複十字シール募金〉(敬称略)

福井県 — 福井厚生病院、福井愛育病院、武生記念病院、システム研究所、打波外科胃腸科医院、社会福祉法人大日園、福仁会病院、信越化学工業武生工場、勝山高校、林病院、日本原子力発電、美浜町女性の会、敦賀市連合婦人会、アイシンエイダブリュ工業、日信化学工業、坂井地区医師会、福井赤十字病院、今立中央病院、泉ヶ丘病院、鳥羽システム、大野市医師会、大野市連合ふわわ女性の会、福井県済生会病院、福井勝山総合病院、勝山市医師会

京都府 — 京都府歯科医師会、山口務、田淵利子、中井克是

大阪府 — 佐藤裕志税理士事務所、三島厨器産業、谷淳吉、岩田吉一、岡田武忠、佐伯崇邦、永井利夫、久保しおり、柏木薫、村田清三、波多野吉洋、東昭和、植田嘉明、大阪本社、竹井広子、古堅ヒデ、梶原由子、苗加病院、根津清、志村晴信、野間口有、藤原良江、佐藤壽、圓光寺、伏見製菓、理智院、礪家貫立、宇賀一郎、永尾尚子、森井塗装店、乾慶子、明石恵実、光陽保育園、小川豊邦、寺澤恒子、国際ソロプチミスト大阪・門真、中村孝枝、仁木正己、小林武彦、米田明正、労務管理・経営管理中村事務所、岩本進、山戸康司、福田茂樹、阪口恵蔵、神慈秀明会神崎支部、渡部ヒサ、中谷廣一、加納敏子、澤崎功、あずさ監査法人、全国共済農業協同組合連合会、中島クリニック、植野實、日本ペイント寝屋川事業所、入船盛弘、なかじまあき内

科クリニック、小澤昌治、さくら、村上正光、松下朱実、廣岡政明、稲井禮樹、前田商店、青木陽子、木村昭、石川幸助、大阪府済生会吹田病院 総務課、森本淳祐、藤井クリーニング、ふじや印刷、北修爾、南忠佳、上田正彦、月江寺、辻野隆志、重光利朗、山本忍、水野正彦、木村昭、健昭会なほ病院、清水郁代、清水美代子、田口鐵男、オークボ、川口憲明、松谷徳一、清正、物療学園、島西チカエ、八田光子、西田淳、タクセス、大阪本町法律事務所、三好隆夫、河面孝、岡本高司、鶴満寺、楠宗一、黒田康信、渡辺敬雄、四宮章夫、辻義則、豊和貿易、佐々木卓志、藤田法律事務所、森蘭玄堂、岡野幸義、恵生会、浅野英雄、林正明、池内正子、樟蔭学園、内藤道夫、井上クリニック、露口泉夫、稲岡順子、丸十コーポレーション、浅海電気、日本酢ビ・ポパール、北居俊夫、窪田純子、黒田美子、盛田利郎、三協国際特許事務所、加貫ローラ製作所、友國照子、岡本安代、東邦インターナショナル、鳥貴族、赤井マリ子、原一仁、京町弥吉診療所、青樹会病院、黒川和秋、大槻隆一、林俊男、丸高三都子、横山正博、杉山慶教、吉祥院、赤田和也、小丸克之、日本医学、森田医療器、竹内化学大阪営業所、ポート、松浪硝子工業、フクダ電子近畿販売、斎藤愛弘、水本惣二、ミナト医科学、東芝メディカルシステムズ、松下昭、道原和己、星光ビル管理、フェリス、関薬、イズミ車体製作所、岸和田交通、文クリニック、堀井薬品工業、白洋舎、月岡榮子、新しいもや、都築電気、藤江クリニック

本部 — 鈴木明、平林方英、鈴木真、コウダエツコ、石水社、梅田鍍金工業所、中央工設、中島達晃、宝泉禅寺、久松孝之、東華教育文

化交流財団、関百合子、近藤板金、鈴木照男、善照寺、廣瀬勝、館山健之進、川崎区役所地域保健福祉課、安芸直、ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会、馬場元毅、関口紀子、木島孝作、松村芳朗、六合製作所、無藤隆、山本秀夫、砂沢八余繪、飯田豊子、伊東紘、清和企業、宮川昌夫、タケシタトオル、深田キディ、木村産業、ドクターセラム、常楽寺、久富順平、廻谷正、成美堂出版、ダイニ、東精工、木村洋子、鎌田昭次、あかし歯科医院、鈴木石材店、押野茂、カネモク工業、佐久間清美、高橋伸介、岡崎忠治、神田辰男、北里一郎、小野歯科医院、鎌倉順子、坂戸ガス、霞会館、浜四津尚文、草間光一、斎藤和男、江北商事、アイデポット、田澤夏代、村田トシ子、高井亮治、西村商店、日本大学本部総務課、赤木泰昌、山本隆幸、鈴木秀男、吉田清、星澤政枝、久保田節子、日冠、日本サービスセンター、ティー設計工房、園田学園女子大学庶務課、新和設備、近喰ふじ子、タケシタマサミ、大久保医院、聖明福祉協会聖明園曙荘、東京光の家、小林洋子、小林健、加藤千博、国精工業、梶谷純子、有馬慎二、石川美知子、水谷靖治、深澤龍一、松家直子、野村昌子、原書房、為貝昇、中川昭弘、多賀電気、藤井宏昌、前川本店、お告げのフランシスコ姉妹会、芦田光則、三和三郎、福澤澤行、三和直子、中園智昭、和氣修、西山敬介、関瑛一、伊地知誠、徳本浩、長田裕子、イツエ・エレクトロ、天徳院、亀長澄子、益井輝也、河津秋敏、松林院、福田珂珠子、保志益子、坂口正道、笠井俊彦、溝口文雄、ホンダツインカム、早川一胤、長尾立子、田村淑子、石井迪子、多泰子、高柳正夫、山縣博、須知雅史

平成29年1月15日 発行
複十字 2017年372号
編集兼発行人 前川 眞悟
発行所 公益財団法人結核予防会
〒101-0061 東京都千代田区三崎町1-3-12
電話 03(3292)9211(代)
印刷所 勝美印刷株式会社
東京都文京区白山1-13-7
電話 03(3812)5201

結核予防会ホームページ
URL <http://www.jatahq.org/>

<編集後記> 昨年も時間に追われ、あっという間の一年でした。今年は酉年。自分を見つめ直し一歩でも飛躍することを目標にしたいと思います。

本誌は皆様からお寄せいただいた複十字シール募金の益金により作られています。

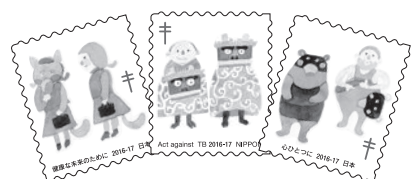
◆複十字シール運動 — みんなの力で目指す、結核・肺がんのない社会 —

平成28年度複十字シール

複十字シール運動は、結核や肺がんなど、胸の病気をなくすため100年近く続いている世界共通の募金活動です。複十字シールを通じて集められた益金は、研究、健診、普及活動、国際協力事業などの推進に大きく役立っています。皆様のあたたかいご協力を、心よりお願いいたします。

募金方法やお問い合わせ：募金推進部

結核予防会 寄付 検索 またはフリーダイヤル：0120-416864 (平日9:00~17:00)



Happy
New Year
2017

結核予防会では、アジアとアフリカの3カ国の海外事務所を拠点に、結核から人々を守る活動に取り組んでいます。本年も、日本人スタッフ、現地スタッフ一丸となって、結核制圧を目指して努力していきます。

私たちの活動は、複十字シール募金をはじめとする日本の皆様のご厚意に支えられています。感謝申し上げますと共に、この一年の皆様のご健康とご多幸をお祈り致します。
(海外事務所スタッフ一同)

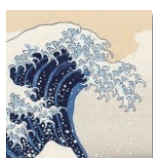
フィリピン事務所



カンボジア事務所



ザンビア事務所



国際結核肺疾患予防連合アジア太平洋 地域学術大会 (APRC2017) 準備委員会だより

No.10

いよいよ開催まで3カ月を切りました。この原稿を書いているときはまだ5カ月前なので、あまり実感がありませんが、参加登録の早期割引が2017年1月末までなので、いろいろな場で宣伝しています。

大変遅くなりましたが、無事プログラムがホームページに掲載されましたので、参加者がぞくぞく増えております。

国際結核肺疾患予防連合世界大会は、2016年10月26日（水）～29日（土）まで英国リバプールで開催され、結核分野を中心に各国の対策関係者、研究者、NGO、企業など123カ国から3,069人が参加しました。同会場では、結核予防会／結核研究所のブースに、ポスターやプログラムの概略を説明したチラシを目立つところに展示（写真1）し、リバプールの次はぜひ日本にお越しくださいとアピールしました（写真2）。

また、本学術大会への参加登録など、お困りごとについては、事業部普及広報課（電話03-3292-9288）まで遠慮なくご用命ください。



写真1 スタッフ総出で飾りつけられたJATA/RITブース



写真2 チラシを受け取ってくださった未来の参加者？

どうして

無関心で
いられるんですか
……!?

結核は、 ひとつと ではない。

世界三大感染症のひとつ、結核。

それは社会の中にしぶとく残って、
人々を苦しめ続けています。

世界の結核の60%はアジアで発生しており、
わたしたち結核予防会は、
結核対策の国際協力を進めて、
日本国内だけでなく、アジアと世界の結核を
制圧するために、日々活動しています。

2020年までに、日本を結核低蔓延国に^{*}

※結核罹患率10万対10以下

公益財団法人結核予防会
Japan Anti-Tuberculosis Association